林野庁　九州森林管理局

屋久島森林生態系保全センター

令和７年度　年報

太鼓岩から眺める奥岳と緑豊かな森林景観

内容

Ⅰ 概要 1
Ⅱ 森林生態系保全・保護 2
1．森林生態系モニタリング 2
（1）屋久島東部地域の垂直方向の植生モニタリング調査 2
（2）湿原の植生状況モニタリング調査 5
2．森林生態系保全 21
（1）著名木の樹勢診断（龍神杉） 21
（2）倒伏した弥生杉周辺のモニタリング調査 23
（3）森林パトロール 26
（4）ヤクシカ対策 28
3.気象モニタリング 29
Ⅲ 普及教育・森林空間利用 32
1．森林環境教育の実施 32
（1）屋久島高等学校 32
（2）島外の高等学校 32
（3）小中学校森林教室 33
（4）インターンシップ 34
（5）屋久島森の塾 34
（6）その他 35
2．屋久島自然休養林 36
（1）森林環境整備推進協力金制度の実施 36
（2）利用者数 36
Ⅳ その他 38
1．入林の手続き状況 38
（1）入林届件数 38
（2）調査研究者の入林 38
2．広報活動 41
（1）庁舎内展示 41
（2）「屋久島森林生態系保全センター」ホームページの更新 42

これらのほかにホームページにはたくさんの情報が掲載されているのでぜひご覧ください

九州森林管理局 HP ＞ 森林管理局へようこそ ＞ 森林管理署等の概要 ＞
屋久島森林生態系保全センター

https://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/

Ⅰ 概要

屋久島は、九州最南端の佐多岬から南方約 60km の海上に位置し、東西 28km、南北 24km、周囲 105km のほぼ円形の島で、中央山岳部に九州最高峰の宮之浦岳(標高 1,936m)をはじめ、1,000m を超える山々が連なる山岳島であり、その形状から洋上アルプスとも呼ばれています。また、黒潮の影響により温暖多雨で、海岸地帯で 4,000mm、中央山岳部では 10,000mm もの年間降水量があります。

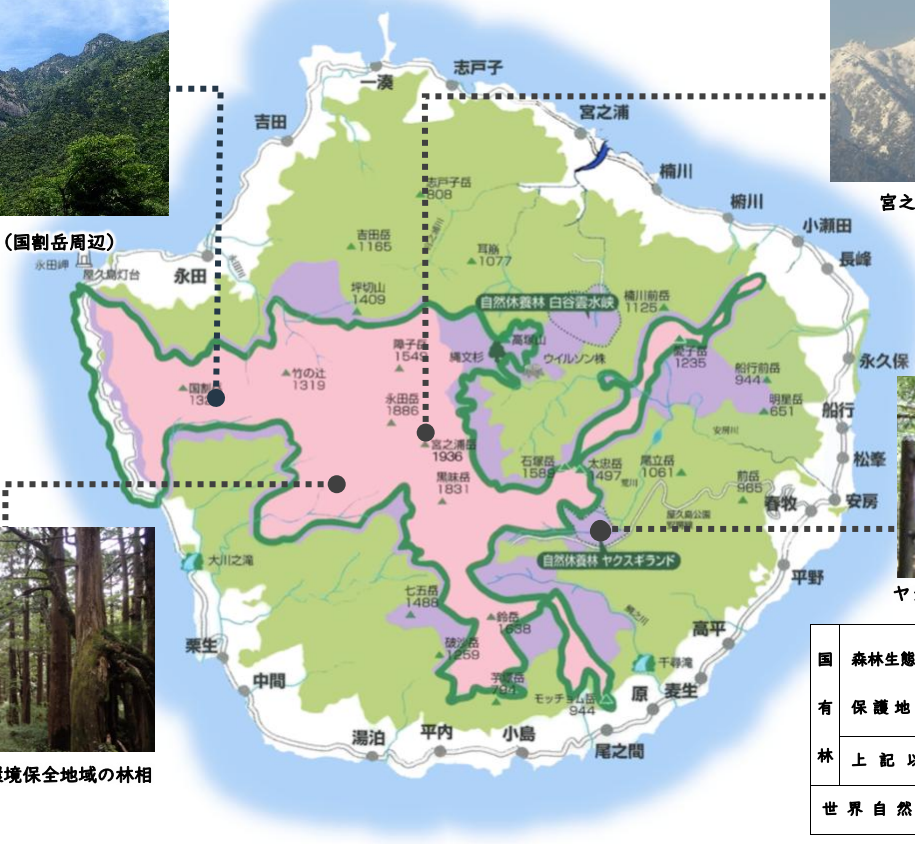
屋久島の総面積は 50,425ha、そのうち 38,240ha が国有林です。国有林面積の 4 割にあたる 15,185ha が森林生態系保護地域に指定され、世界自然遺産地域の約 95%と重複しています。

屋久島といえば、樹齢 1,000 年を超えるヤクスギに目がいきがちですが、海岸部の亜熱帯気候から奥地山岳部の亜寒帯気候まで、それぞれの気候に応じた植物が見られる垂直分布が特徴で、多くの希少種、北限種、南限種が生育している非常に重要な地域となっています。

屋久島森林生態系保全センターでは、世界自然遺産地域をはじめとする森林生態系保護地域の貴重な森林生態系の適切な保全と利用を図るため、各種モニタリング調査や保全対策、山岳部等の森林パトロール、森林環境教育、自然休養林等の適正な利用などについて、関係する各機関と連携して取組を進めています。

植生垂直分布（国割岳周辺）

宮之浦岳（太鼓岩より）



花山の原生自然環境保全地域の林相

ヤクスギランド（ヤクスギ伐り株）

国有林	森林生態系保護地域	保存地区	
		保全利用地区	
	上記以外の国有林		
世界自然遺産登録地域			

屋久島の面積 ・・・・・・・・・・ 50,425ha
屋久島森林面積 ・・・・・・・・ 45,802ha （島の約 91%）
国有林の面積 ・・・・・・・・・・ 38,240ha （島の約 76%）
森林生態系保護地域 ・・・・ 15,185ha （国有林の約 40%）
(内訳)保存地区 ・・・・・・・・・ 9,601ha
保全利用地区 ・・・・・ 5,585ha

国立公園（陸域） ・・・・・・・・ 20,989ha （島の約 42%, 国有林の 55%）
原生自然環境保全地域・・・・・・ 1,219ha
世界自然遺産登録地 ・・・・・・ 10,747ha （島の約 21%, 国有林の 28%）

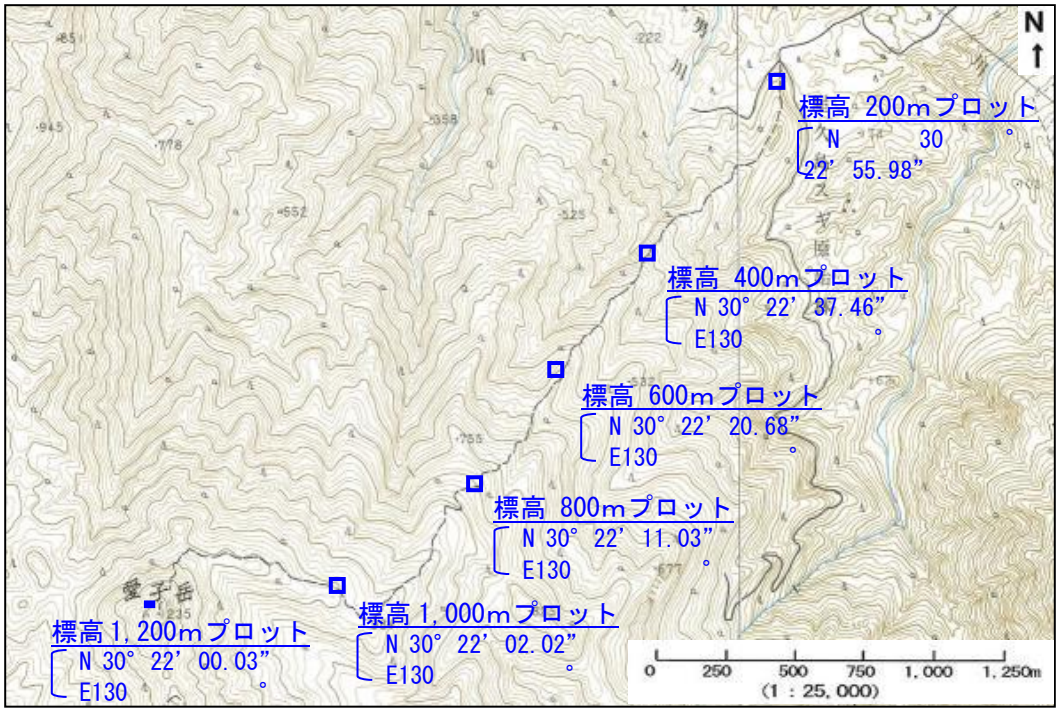
Ⅱ 森林生態系保全・保護

Ⅰ. 森林生態系モニタリング

(1) 屋久島東部地域の垂直方向の植生モニタリング調査

令和７年度の植生垂直分布調査は、令和６年に襲来した台風 10 号により北部の神之川林道、龍神杉歩道が崩落し、復旧の目途が立たないため、６順目となる屋久島東部を対象とした植生垂直分布調査を１年前倒しで行った。

調査は、標高 200ｍ地点から標高 1，200ｍ地点（愛子岳山頂直下）までの標高 200ｍごとにモニタリングプロットを設け、群落配分調査、毎木調査、及びプロット周辺の植生及び出現種調査を行った。



植生垂直分布調査地点位置（国土地理院２万５千分の１の地形図より）

調査結果（各標高の確認種数の変化と植生状況）

調査結果概要（樹高別モニタリングプロットごと）　※（　）書きは前回（令和３年度）の確認種数

標高	プロット地点	調査結果の概要
200m	尾根・谷含む 緩傾斜面 林齢 173 年生の天然生林（二次林）	74 種(80 種) イスノキを優占種とする照葉樹二次林。直近2回の調査で、スダジイの大径木はカシナガ被害と腐朽が目立ち、台風の襲来を受けて多数の枯死・倒木を確認した。既に大径木の多くが枯死し、今回の調査で新しい枯死木は少なかった。亜高木層はスダジイ・イヌガシが多く、低木層はタイミンタチバナ・イヌガシ、草本層はヨゴレイタチシダが優占し、タシロルリミノキも多い。大きく攪乱された前回と比較してギャップが減少し、パイオニア種や、荒地に出現するつる植物の他、植物種間の競争で 17 種が消失した。一方で、シカの食害は極めて少なく、ネズミモチ、クロガネモチ等の嗜好種を含む 11 種が新規に確認され、フユイチゴは 24 年ぶりに確認された。オキナワシタキヅル、ナギ等 15 種が、この標高でのみ確認されている。

標高	プロット地点	調査結果の概要
400m	北向き平行急斜面 林齢 173 年生の天然生林（二次林）	77 種（65 種） イスノキを優占種とする照葉樹二次林。高木層はスダジイも多い。高木・亜高木層で枯死したのは、大半が樹高 10m 前後に達したクロバイ等の小高木であるため、林冠が鬱閉して林内は暗い。亜高木層はサクラツツジが多く、低木層はタイミンタチバナが見られるが極めて少ない。草本層はヤクシマアジサイが優占し、ヨゴレイタチシダも多い。アオモジ、アオノクマタケラン等9種が消失した。一方でウラジロガシ、ネズミモチ等の嗜好種、キッコウハグマ、サンショウソウ等、林床の草本植物を含めた 21 種が新規に確認され、シカの食害や踏圧の減少していることが示唆された。この標高からハイノキ等の冷温帯構成種が散見される。
600m	北西向き平行急斜面 林齢 173 年生の天然生林（二次林）	71 種（70 種） アカガシを優占種とする照葉樹二次林。高木層はスダジイも比較的健全である。高木層下部から亜高木層はサクラツツジ、タイミンタチバナが大半を占めている。低木層・草本層はタイミンタチバナが優占し、サクラツツジ等がこれに続く。枯死したのもこの2種の斜立木であり、林冠が鬱閉して林内は一層暗い。イワガラミ等のつる植物、シカ不嗜好種のサザンカ、ユズリハの他、コスギイタチシダ等の湿潤な冷温帯構成種を含む 10 種が消失した。一方、イスノキを寄主とするヤクシマツチトリモチが見られるのがこの標高の特徴である。嗜好種のモチノキ、ヤマグルマ、ハリギリ等の高木性の稚樹や、不嗜好植物のサネカズラ等 11 種が新規に確認された。サルトリイバラは 19 年ぶりに確認された。
800m	北東向き緩斜面林齢 173 年生の天然生林（二次林）	79 種（73 種） クスノキ科高木が優占する天然生林。この付近は雲霧帯に入るため樹皮に苔が着生し、風衝被害や土砂流出が多い。樹高は11ｍに届かず、胸高直径20cm台の中径木が林立する。亜高木層・低木層はサクラツツジ、ハイノキが突出して多い。またヤクシマアジサイが樹高2m を超えるのはこの標高だけである。草本層Ⅰはサザンカ、ヤクシマアジサイ、草本層Ⅱはホコザキベニシダが多い。シカ嗜好種のウラジロガシ、コガクウツギだけでなく、忌避植物のハナガサノキ等 11 種が消失した。一方でエゴノキ等のパイオニア種、コバンモチ、ヤマグルマ等の嗜好種を含む 17 種が新規に確認された。シノブは 19 年ぶり、サツマイナモリは 24 年ぶりの確認となった。ムベ、ヤマボウシ等 11 種が、この標高でのみ確認されている。
1,000m	北向き緩斜面 林齢 173 年生の天然生林（二次林）	85 種（73 種） アカガシが優占する天然生林。南東にはヤマグルマが多い。落雷による枯死木が多く、所々ギャップがあり、低木が叢生する。亜高木層以下の階層はサクラツツジ、イヌガシ、ハイノキの3種が大半を占め、シカ食害の影響が強く現れた林相である。オオバライチゴ、スズコウジュ等の草本、高木性樹種のツガ、シダ類のホソバトウゲシバ等5種が消失した。一方でハゼノキ等のパイオニア種、シダ類のキヨスミコケシノブ、ヒトツバ等、17 種が新規に確認された。ノキシノブ、マテバシイは 19 年ぶりの確認となった。また、タカサゴシダとその近縁種との交雑個体も 1 株確認した。前回調査から記録のあるカラタチバナ等9種は、この標高でのみ確認されている。
1,200m	北東向き山頂直下 風衝地の矮小林	57 種（49 種） スギが優占する矮小林。本数ではアカガシが多い。風衝地のため、最上層は亜高木層で樹高は4m をわずかに超える程度である。低木層Ⅰ・Ⅱともサクラツツジ、草本層はウラジロが優占し、シカの食害の影響を受けた林相である。マルバヤマシグレ等4種が消失した。一方でイッスンキンカ、センブリ等の草本、シカ嗜好種のナナカマド、リョウブ、シダ類のキヨスミコケシノブ等、12 種が新規に確認された。キッコウハグマ、ヤクシマチャボゼキショウは 19 年ぶりの確認となった。ケイビラン、ミヤマシキミ等 20 種が、この標高でのみ確認されている。今回もコツクバネウツギの萌芽枝と、ヤクシマノギランにシカの食痕が目立った。

植生モニタリング調査の結果においては、優占種や構成種に変化が生じた地域もあるので、それが一時的なものか、更に遷移していくのか、状況を注視していく必要がある。なお、草本層及び低木層の変化については、屋久島の中では現在、最もシカの生息密度が低下しているとされる地域であり、これから起こるシカの生息密度の増減についても注視していく必要がある。

ヤクシカによる採食圧の影響が最も多いのは西部地域（国割岳西側斜面）で、続いて中央部地域（大王杉～宮之浦岳）や南部地域（烏帽子岳・七五岳）で多く、東部地域は最も少ない（北部地域（高塚山・耳崩山）は未調査のため不明）。前回（令和３年度）と比較すると、各標高で明らかに下層植生が回復した。回復した種はシカの不嗜好植物だけでなく、ヤブニッケイ、ネズミモチ等嗜好植物の実生でも食害を受けずに生育しているものが確認されることから、シカの密度は極めて低いことが推測される。但し、九州森林管理局「野生鳥獣との共存に向けた生息環境等整備調査・捕獲事業（屋久島地域）」で実施されている愛子西の糞粒調査では本年度、３年ぶりに糞粒の確認があり（0.0 頭/㎢→0.8 頭/㎢）、現場でシカの鳴き声も確認されている。愛子岳登山道入口前の皆伐地から既に草本や低木が繁茂しており、シカの侵入を許すと食害が増加する懸念があるため、シカの生息密度の変化や、現地の食害の状況には今後も注視していく必要がある。

●前回（令和３年度）の調査結果と今回の調査結果とを総合的に比較検討

・標高 200m は、ブナ科萎凋病（カシナガ被害）及び腐朽菌によるスダジイ大径木の枯死が減少した。シカ食害が減少し草本層の植被率は高いが、林冠閉鎖が進み種数が減少した。

・標高 400m は、高木層でイスノキが優占している。枯死したのは小高木であるため鬱閉して低木層の本数が少ない。草本層はヤクシマアジサイが優占し、ハイノキが出現する。

・標高 600m は、高木層でスダジイ、亜高木層でサクラツツジが優占し、亜高木の本数が多い。イスノキは風衝被害で樹高が下がった。草本層はタイミンタチバナが優占し、コバノイシカグマ等の冷温帯種が出現する。

・標高 800m は度々攪乱を受けるため大径木が少なく、クスノキ科高木が林立し、現在はホソバタブが優占している。ヤクシマアジサイが低木層に到達する。この付近は雲霧帯に入るため、苔と着生シダ類が多い。

・標高 1，000m は高木層ではアカガシ、ヤマグルマ、ヒメシャラが優占し、イヌガシ等が混交する。落雷による枯死が多いが、林冠は４年間大きな攪乱を受けておらず、高木層の本数がさらに増加している。標高別の確認種数 85 種は最多である。

・標高 1，200m の最上層は亜高木層で樹高はほぼ変わらず５m 未満であり、スギが優占種である。低木層Ⅰ・Ⅱはサクラツツジ、草本層はウラジロが優占し、シカの食害の影響を受けた林相である。食害は令和３年度から見られ、本年度も特定の植物に食痕が散見された。

・シカの食害の影響は他の地域に比べると程度は小さいが、各標高の調査地はいずれも不嗜好植物で構成され、採食圧を強く受けた単純な林相である。

・低木層の本数は、標高 400m、600m 、800m で増加したが、本数上位の種のほとんどはシカ不嗜好種である。一方、標高 200m、1，000m では減少したが、草本層の被度がともに 60%と高い。標高 400m は森林生態系維持の観点から予断を許さない状況である。

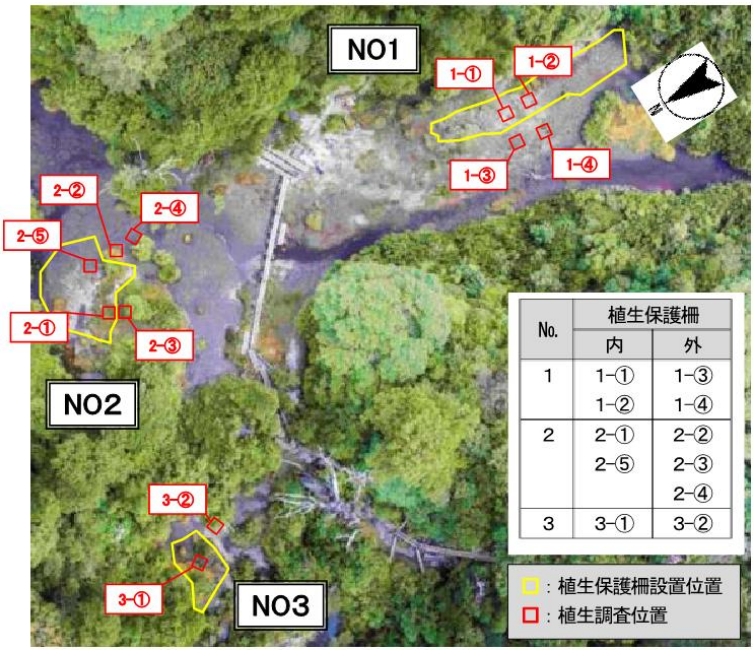
・台風等の被害としては、４年間の高木層の本数の変化を見る限りわずかな変動に留まっており、南部・西部・北部地域等の森林にもたらされたような大きな攪乱は生じていない。

(2) 湿原の植生状況モニタリング調査

令和７年度湿原保全対策では、(ア)小花之江河における植生保護柵内外の植生モニタリング調査、(イ)湿原における水の流入流出量および気象モニタリング調査、(ウ)地形調査、(エ)ハベマメシジミの生息調査、(オ)５年毎に実施している水域環境・土砂堆積の分布と堆積量・植生群落分布状況・落ち葉だまりの分布状況調査、(カ)試行的保全対策箇所の土砂・枝条等の積状況のモニタリング調査、(キ)保全対策実施計画書の作成、(ク)令和５年度及び６年度に実施した湿原保全対策箇所の調査及び取りまとめを行った。

(ア)小花之江河における植生保護柵内外の植生モニタリング調査

シカによる食害・踏圧を把握するため植生保護柵内外の植生状況調査を行った。平成 29 年度に設置した植生保護柵内外にある調査プロット（１m×１m）10 箇所、令和元年に新たに設置した植生保護柵内にある調査プロット（１m×１m）１箇所について植生調査を実施し、柵内外の植生の回復状況を確認した。



植生保護柵設置位置と植生プロット位置

小花之江河は平成 29 年に湿原内３箇所に植生保護柵を設置してから９年間が経過した。この間、新規参入や消失した種だけでなく、一度出現した種が消失し、再確認する種も見られるようになった。柵内でのそのような現象は、シカの食害の有無というより、植物種間の競争が起きていることが考えられる。本年度の種数を平成 29 年度と比較すると、柵内では５～11 種、柵外では２～12 種と種数は増加している。

平成 29 年度と令和７年度の種数増減

調査プロット	1		2							3	
	① 柵内	② 柵内	③ 柵外	④ 柵外	① 柵内	② 柵内 →RI外	③ 柵外	④ 柵外	⑤ RI 新柵内	① 柵内	② 柵外
H29年度合計種	7	2	6	2	6	3	7	5	—	15	12
R7年度合計種	12	11	9	4	17	7	19	8	11	25	20
増減	5	9	3	2	11	4	12	3	11	10	8

しかし柵内外とも目立つのは樹木の実生の侵入である。特に柵内では、これらの生長が他の湿原植生構成種の生育に影響を及ぼす可能性があり、生長具合や被覆率の程度によっては高木性樹種の剪定等、適正に管理していく必要がある。

（イ）湿原における水の流入流出量および気象モニタリング調査

湿原の水文学的な特徴を把握するため、令和元年度から引き続き a）流入流出量観測、b）豊水期および渇水期の流入流出量観測、c）気象観測の３つに分けてモニタリングを行った。

令和４年度前半までの a）～c）により得られたデータを基に、水の流入量と流出量及び降雨量や流域面積との関係から湿原の水文学的な特徴を把握した。令和５年度からは、またデータを蓄積し、木道付替えの翌年や、流水分散を実施した翌年に、流出特性や水収支の分析を行い、湿原全体への水涵養の変化を把握することとしている。

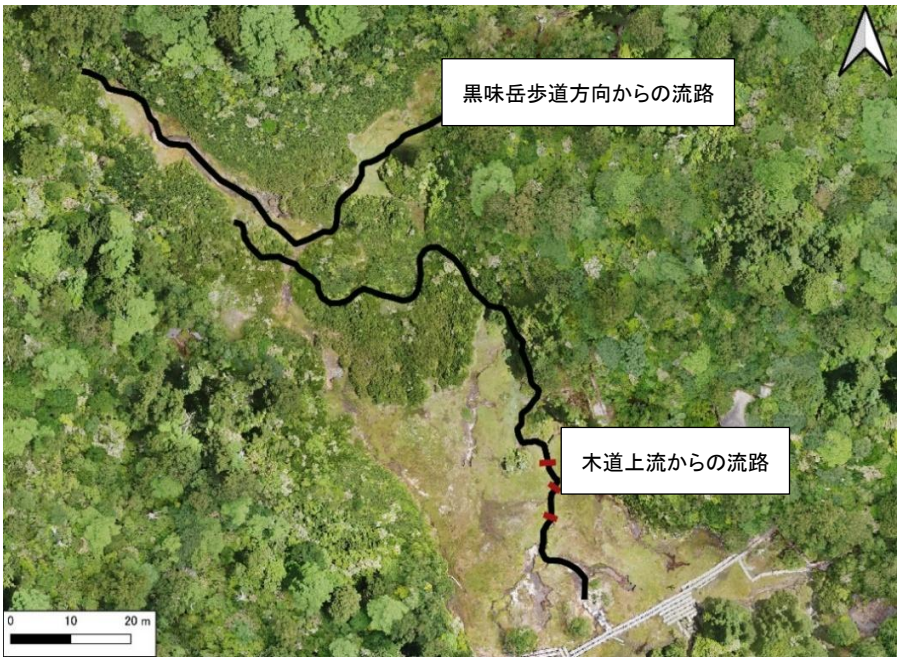
なお、令和５年度より湿原保全対策を一部で試行的に実施しており、継続したモニタリングが必要となることから、現在設置しているそれぞれのモニタリング機器については令和７年度以降も継続して設置する。

（ウ）地形調査

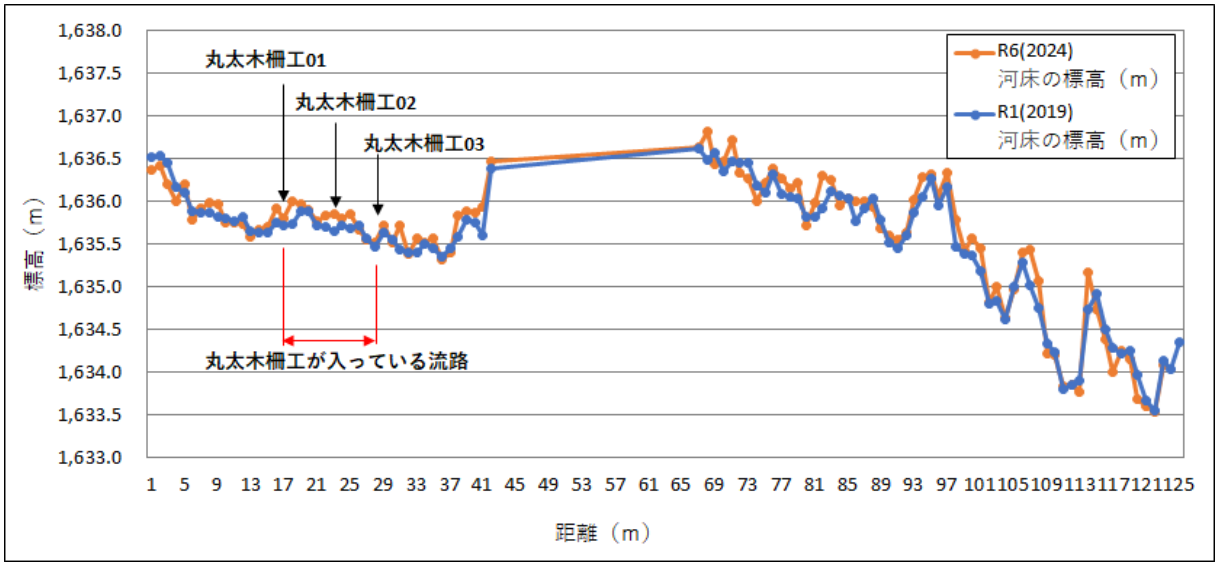
湿原地表面の起伏を把握するための、簡易なドローン撮影を令和元年度から６年にわたり年１回撮影しており、地表面及び流路の短期的な変化データを取得している。令和７年度も引き続き調査を行い、オルソ画像、標高データ（３cm メッシュ）を作成し、地表面及び流路の短期的な変化を観察した。また、保全対策実施前後の比較データとして活用するために、次年度も観察していくこととしている。

●調査結果

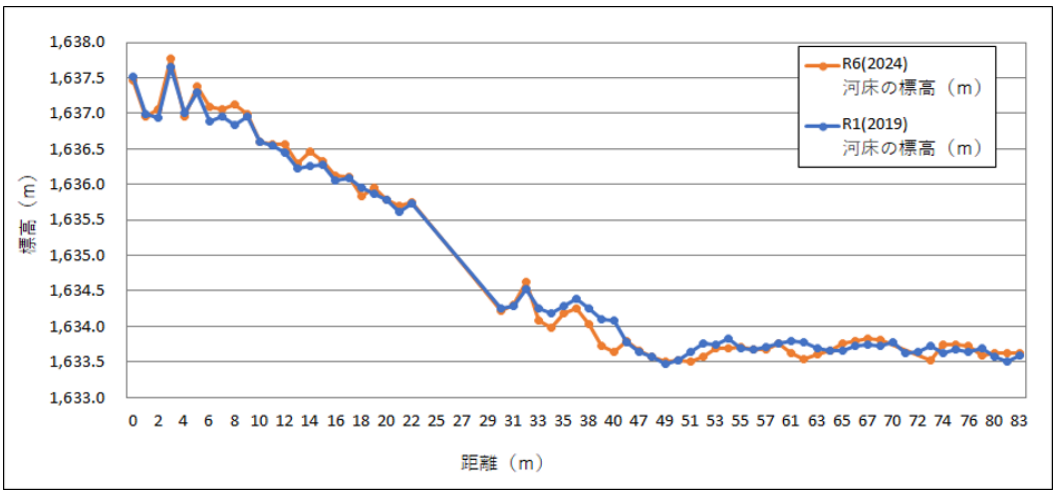
花之江河の流路の河床変化…木道上流からの流路および黒味岳歩道方向からの流路の双方において、地形の変動は見られるものの、横方向侵食が進行・拡大している状態にはなかった。



花之江河の河床変化対象流路２箇所



木道上流からの流路



黒味岳歩道方向からの流路

(エ)ハベマメシジミの生息調査

ハベマメシジミは落ち葉溜まりを好んで生息する二枚貝であり、鹿児島県 RDB において絶滅危惧Ⅰ類に分類されている。本種については、世界遺産地域モニタリング計画に基づき、生息状況の変化を把握するため、これまで５年毎に４回（H18、H22、H27、R２）、コドラート調査（0.5 ㎡）および落ち葉溜まりでの概況調査を実施してきた。前回の令和２年度調査では、小花之江河のコドラート調査地１において２個体が確認された一方、花之江河では生息は確認されなかった。

令和３年度は５年毎の定期調査年ではなかったが、

ハベマメシジミ

出典：洋上アルプス　No344

林野庁屋久島森林生態系保全センター

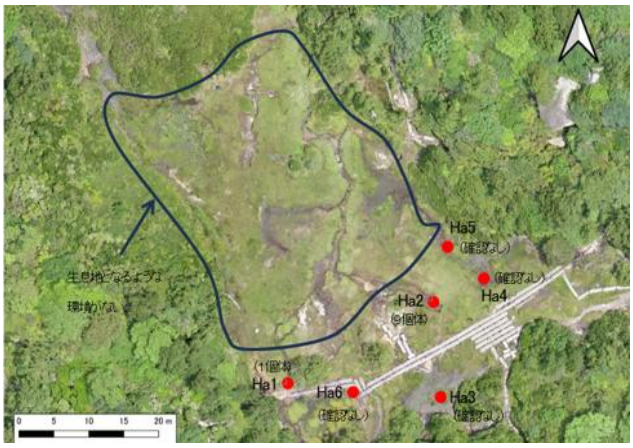
・軟体動物門／二枚貝綱／異歯類／ マルスダレガイ目（ハマグリ目）／マメシジミガイ科に該当
・鹿児島県レッドデータブック絶滅危惧Ⅰ類

湿原内の木道改修に伴う影響を見据え、改修前の生息状況を把握する必要があると判断し、調査範囲を拡充して、従来のコドラート調査箇所に加え、デトリタスが堆積する淀みを対象とした生息調査を開始した。その結果、平成 27 年度以降、生息確認のなかった花之江河において複数箇所で生息が確認され、小花之江河においても、生息確認地点が拡大していることが確認された。

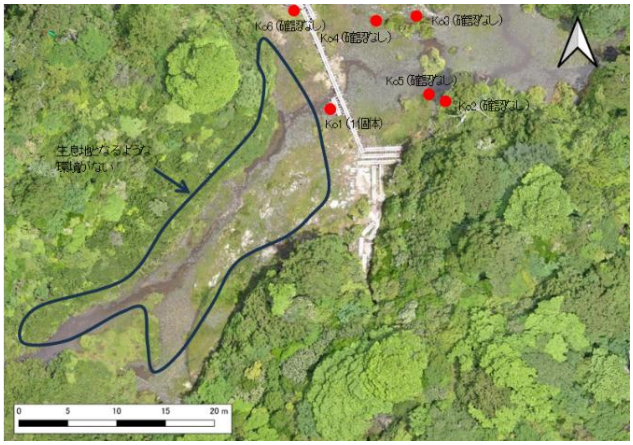
花之江河では、本年度は２箇所（Ha1、Ha2）で計 10 個体を確認した。生息環境としては、Ha1 では旧植生保護柵上流からの流入により、通年で緩やかな水の流れが維持され、渇水することはない環境であった。また、Ha2 は湧水地に位置し、通年を通して数十センチ程度の水位が保たれるとともに、デトリタスの堆積が認められる環境であった。なお、生息が確認できなかった４箇所（Ha3、Ha4、Ha5、Ha6）については、調査時が豊水期であったことから、いずれの地点においても緩やかな水の流れ、または水深数センチ程度の淀みが形成されていたものの、ハベマメシジミの生息は確認されなかった。

小花之江河では、本年度は１箇所（Ko1）で１個体を確認した。Ko1 の生息環境は、湿原内でも標高が低い位置にあり、通年で緩やかな水の流れが維持され、渇水することはない。一方、生息が確認できなかった４箇所（Ko2、Ko3、Ko4、Ko5）については、花之江河における非確認地点と同様の環境条件であった。

生息地の特徴としては、大雨時に湿原全体がプール状となり流路の水量が急増する環境である一方、デトリタスや落ち葉等の堆積状況の違いにより、当該種が留まりやすい地点と留まりにくい地点が存在すると考えられる。



令和７年度の生息調査箇所（花之江河）



令和７年度の生息調査箇所（小花之江河）

（オ）土砂堆積の分布と堆積量・水域環境・植生群落分布状況・落ち葉だまりの分布状況調査

令和元年度と同じ区域においてオルソ画像と標高データ(３cm メッシュ)を作成するために、ドローン撮影をおこなった。オルソ画像からは、湿原環境の外観の変化を把握するため、土砂堆積の分布・堆積量、水域環境(流路・湛水域)、植生群落分布の図面を作成し、過去の調査結果(平成 18 年、22 年、27 年、令和２年)との比較を行い変化の推移を分析した。

花之江河

●土砂堆積の分布・堆積量

土砂堆積地の面積と堆積量は表のとおり示した。前回調査の令和２年度結果と比較すると、土砂堆積箇所数は２箇所減少、面積や堆積量は 1.03 倍と若干増加している。堆積箇所数が増加し

た一因としては、降雨後の土砂移動により、土砂が一時的に流路内へ分散したことが影響していると考えられる。湿原全体としては、祠周辺において常に土砂の堆積が認められる。この箇所は湿原上流部に位置し、上流から流入した土砂が最初に到達する場所であるとともに、流路の横浸食が進行し勾配が比較的緩やかな地形条件にあることから、土砂が流動的に堆積しやすい環境となっていると考えられる。

一方、湿原下流域の黒味岳歩道方向からの流路では、傾斜が緩やかになる箇所において、令和２年度と比較して土砂がより面的に堆積している状況が確認された。この堆積は降雨直後のみならず、晴天が続いた後においても認められており、流動的な堆積ではなく、恒常的な堆積していると考えられる。なお、当該箇所については、年間を通じて複数回の現地確認を行い、堆積状況を把握してきた。

花之江河における土砂堆積地の面積及び堆積量の推移

調査年度	土砂堆積地			ヤクシカ踏跡荒廃地
	箇所数	堆積面積	堆積量	
平成 18 年度	22 箇所	123.3 ㎡	8.58m³	0 箇所
平成 22 年度（平成 18 年度からの増減率）	15 箇所	53.9 ㎡（0.4 倍）	3.24m³（0.4 倍）	1 箇所
平成 27 年度（平成 22 年度からの増減率）	28 箇所	108.9 ㎡（1.7 倍）	5.45m³（1.7 倍）	1 箇所
令和 2 年度（平成 27 年度からの増減率）	39 箇所	105.8 ㎡（0.97 倍）	5.29m³（0.97 倍）	3 箇所
令和 7 年度（令和２年度からの増減率）	37 箇所	108.6 ㎡（1.03 倍）	5.45m3（1.03 倍）	0 箇所

●水域環境

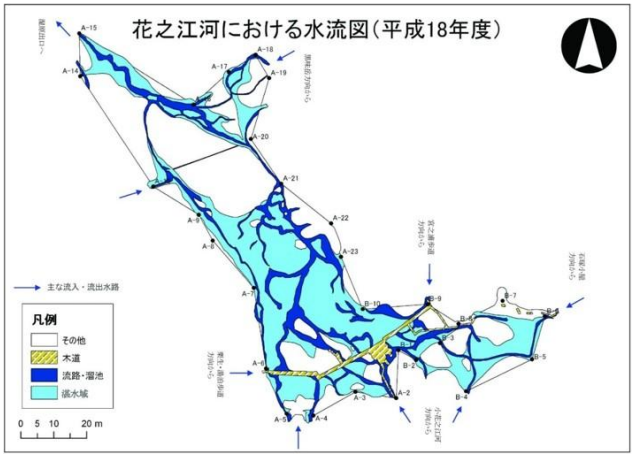
流路（溜池も含む）や湛水域の面積は表のとおり示した。前回調査した令和２年度調査結果と比較すると、流路・溜池の面積が 0.4%減少、湛水域の面積は変動が無かった。

令和２年度以降の顕著な変化として、令和５年３月に流路の固定化要因となっていた植生保護柵を撤去したことにより、植生保護柵撤去跡には木道上流側から下流側へ向かう流れが形成されたことが挙げられる。

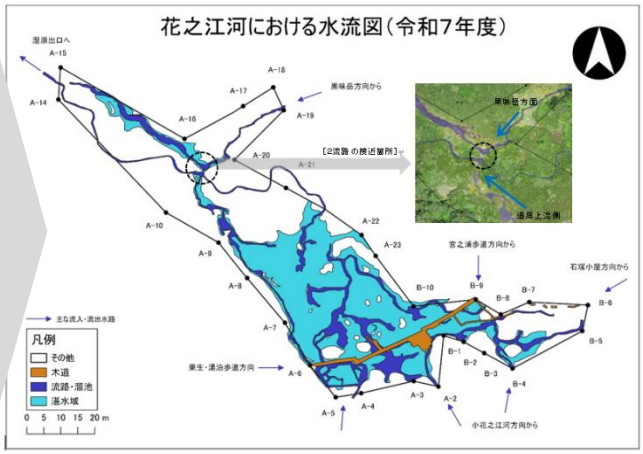
また、湿原下流側では、令和２年度以降、黒味岳歩道方向からの流路と湿原上流側からの流路が接近している箇所が確認されており、当時は両流路の間隔が１ｍ以上あった。その後、距離は徐々に縮小し、本年度調査時には約１ｍ程度となっている。今後、これら２つの流路が合流し、小楊枝川支流へ流れ込む可能性が考えられる。

花之江河における流路・湛水域の面積の推移

調査年度	流路・溜池		湛水域		木道		その他		計	
	面積（m²）	率（%）	面積（m²）	率（%）	面積（m²）	率（%）	面積（m²）	率（%）	面積（m²）	率（%）
H18	775.1	15.9	1,937.3	39.6	124.2	2.5	2,051.4	42.0	4,888.0	100.0
H22	826.4	16.9	1,968.8	40.3	124.2	2.5	1,968.6	40.3	4,888.0	100.0
H27	683.9	14.0	2,003.7	41.0	124.2	2.5	2,076.2	42.5	4,888.0	100.0
R02	646.6	13.2	1,960.8	40.2	124.2	2.5	2,280.2	44.1	4,888.0	100.0
R07	663.3	13.6	1,963.1	40.2	124.2	2.5	2,137.4	43.7	4,888.0	100.0



平成 18 年度の水域環境



令和７年度の水域環境

小花之江河

●土砂堆積の分布・堆積量

土砂堆積地の面積と堆積量は表のとおり示した。前回調査した令和２年度調査結果と比較すると、土砂堆積の箇所数は３箇所減少しており、堆積面積は 0.8 倍、堆積量は 0.76 倍となり、いずれも減少傾向を示した。

土砂堆積の分布状況を見ると、湿原全体としては、令和２年度調査においても花之江河側の木道下において浸食が進行し、そこから供給された土砂が湿原中央部へ流入する状況が確認されていたが、令和７年度調査においても同様の傾向が認められた。特に木道中央部周辺は、流速が低下しやすい地形条件にあることから、令和２年度と同様に、土砂が滞留・堆積しやすい環境となっていると考えられる。

また、淀川登山口側のデッキ周辺では、平成 18 年度以降、継続的に土砂堆積が確認されてきた。一方で、令和７年度調査では、同デッキ直下および下流方向における堆積量は令和２年度と比較して減少しており、堆積した土砂の一部が降雨時の流水等により再移動した可能性が考えられる。

以上より、令和７年度時点では、堆積箇所数および堆積量ともに落ち着いた状態にあると考えられる。

小花之江河における土砂堆積地の面積及び堆積量の推移

調査年度	土砂堆積地			ヤクシカ踏跡荒廃地
	箇所数	堆積面積	堆積量	
平成 18 年度	7 箇所	20.7m^2	1.04m^3	0 箇所
平成 22 年度（平成 18 年度からの増減率）	5 箇所	20.1m^2（0.9 倍）	1.01m^3（0.9 倍）	1 箇所
平成 27 年度（平成 22 年度からの増減率）	12 箇所	61.6m^2（3.0 倍）	3.08m^3（3.0 倍）	1 箇所
令和 2 年度（平成 27 年度からの増減率）	23 箇所	73.3m^2（1.2 倍）	3.66m^3（1.2 倍）	3 箇所
令和７年度（令和２年度からの増減率）	20 箇所	56.7m^2（0.8 倍）	2.84m^3（0.76 倍）	0 箇所

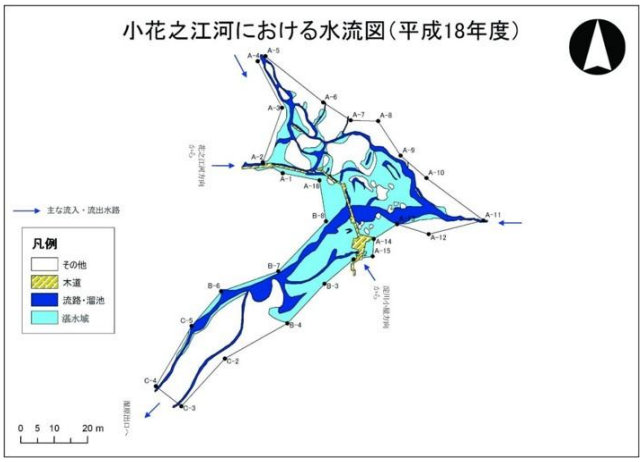
●水域環境

流路（溜池も含む）や湛水域の面積は表のとおり示した。流路・溜池の面積は令和２年度とほぼ同程度で推移しており、顕著な変化は認められなかった。湛水域については、令和２年度と比較して約 0.3%の減少がみられたものの、変化は小さく、長期的にみても大きな増減傾向は確認されていない。

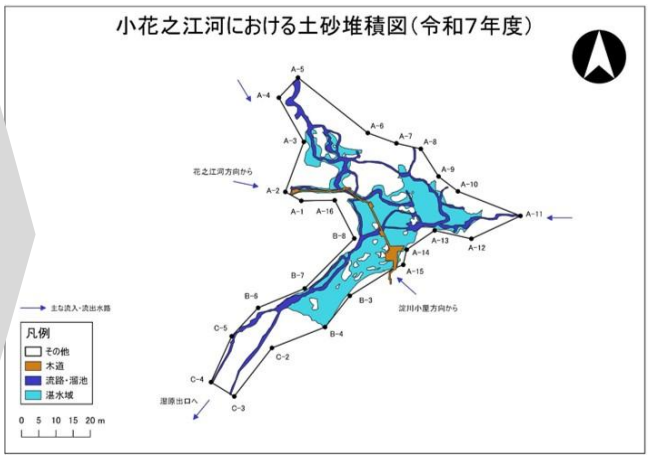
以上より、小花之江河では、水域環境は年度間でわずかな変動を伴いながらも、流路構造や湛水状況に大きな変化は生じておらず、概ね安定した状態が維持されていると考えられる。

小花之江河における流路・湛水域の面積の推移

調査年度	流路・溜池		湛水域		木道		その他		計	
	面積（m^2）	率（%）	面積（m^2）	率（%）	面積（m^2）	率（%）	面積（m^2）	率（%）	面積（m^2）	率（%）
H18	511.9	20.0	846.6	33.1	58.4	2.3	1,143.5	44.7	2,560.4	100.0
H22	574.7	22.4	746.5	29.2	58.4	2.3	1,180.8	46.1	2,560.4	100.0
H27	528.9	20.7	780.5	30.5	58.4	2.3	1,192.6	46.6	2,560.4	100.0
R02	520.9	20.3	770.5	30.1	58.4	2.3	1,210.6	47.3	2,560.4	100.0
R07	520.0	20.3	748.0	29.2	58.4	2.3	1,234.0	48.2	2,560.4	100.0



平成 18 年度の水域環境



令和 7 年度の水域環境

【植物群落】

植物群落は、これまで既存調査の定義で５種類の群落に区分していたが、令和２年度調査では若干乾燥していると思われる箇所にヤクシマダケを確認したことから「ヤクシマダケを優先とする湿原植生群落」を追加した計６種類として経年変化を整理した。

花之江河

●植生群落分布状況

植生群落面積の経年変化は表のとおり示した。変化としては、令和２年度調査においてヤクシマダケを初めて４箇所確認したが、令和７年度調査では、確認箇所は祠近くの１箇所となり、か

つ分布面積も小規模であった。このことから、令和２年度に確認されたヤクシマダケは、湿原内で安定して拡大しているものではなく、一時的に成立した可能性が高いと考えられる。

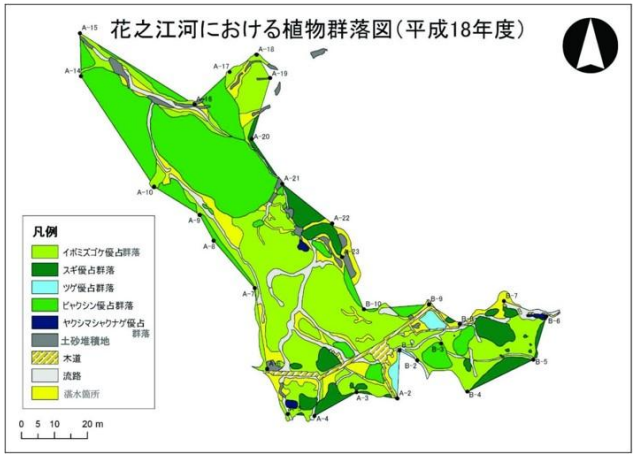
なお、花之江河湿原の周辺斜面や森林帯には、従来よりササ帯が分布しており、ヤクシマダケ自体は周辺に分布している種である。このため、湿原内で確認されたヤクシマダケは、周辺のササ帯から一時的に侵入・定着したものと考えられる。

サロベツ湿原では、乾燥化や排水条件の変化によりササ類が面的に拡大する事例が報告されているが、屋久島の湿原では、年間降水量が多く、地下水位が高い状態が維持されやすいことから、ササのように地下茎による拡大には不利に働いていると考えられる。

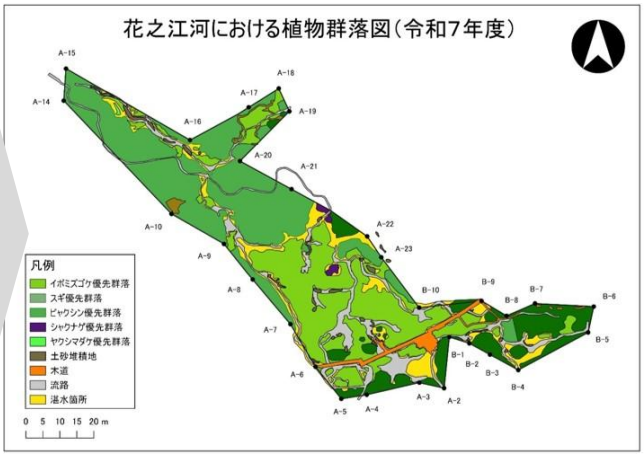
また、花之江河周辺は降雨後の表流水の影響を受けやすく、微地形や地表状態が変動しやすい環境にある。令和２年度に初めて複数箇所でヤクシマダケが確認された背景としては、特定年度の気象条件や攪乱により、一時的に侵入が成立した可能性が考えられる。しかし、個体群が維持されず、令和７年度には分布が縮小した可能性が高い。ササの侵入の状態は乾燥化を示す指標となりうることから、引き続きモニタリングを継続していく。

花之江河における植生群落の経年変化

群落名	平成18年度		平成22年度		平成27年度		令和2年度		令和7年度	
	面積(㎡)	面積率(%)	面積(㎡)	面積率(%)	面積(㎡)	面積率(%)	面積(㎡)	面積率(%)	面積(㎡)	面積率(%)
スギを優占とする群落	416.3	7.9	416.3	7.9	416.3	7.9	487.9	9.3	495.9	9.5
ヒャクシンを優占とする群落	1492.9	28.5	1472.5	28.1	1472.5	28.1	1488.0	28.4	1498.0	28.5
ツゲを優占とする群落	53.8	1	53.8	1	53.8	1	0	0	0	0
ヤクシマシャクナゲ等を優占とする群落	23.2	0.4	23.2	0.4	23.2	0.4	27.5	0.5	29.3	0.6
ヤクシマダケを優占とする群落	0	0	0	0	0	0	19.5	0.4	19.5	0.4
イボミズゴケを優占とする湿原植生群落	1,829.10	34.9	1,880.50	35.90	1,885.10	36	1,865.60	35.6	1,890.00	36
湛水箇所の裸地を含む湿原植生群落	385.4	7.4	392.3	7.5	475.2	9.1	478	9.1	414.3	7.9
土砂堆積地	143.1	2.7	53.9	1	108.9	2.1	105.8	2	108.6	2.1
流路・溜池	775.1	14.8	826.4	15.8	683.9	13	646.6	12.3	663.3	12.6
木道	124.2	2.4	124.2	2.4	124.2	2.4	124.2	2.4	124.2	2.4
計	5243.1	100.0	5243.1	100.0	5243.1	100.0	5243.1	100.0	5243.1	100.0



平成 18 年度の植生群落



令和７年度の植生群落

小花之江河

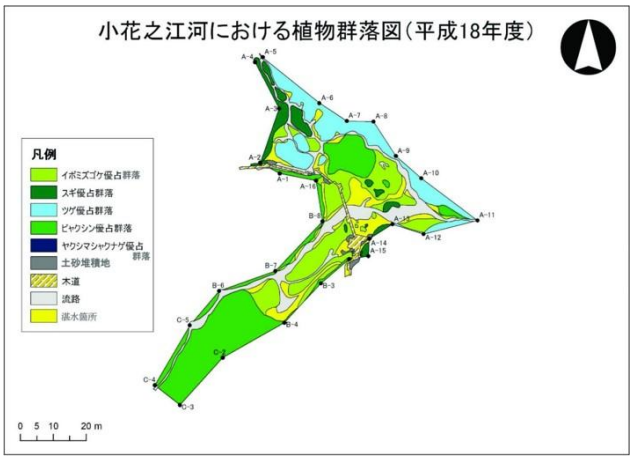
●植生群落分布状況

植生群落の面積の経年変化は表のとおり示した。令和７年度調査では、イボミズゴケ群落の面積は令和２年度よりやや増加したものの、平成 18 年度と概ね同程度の水準にとどまっており、長期的の拡大している傾向は認められない。小花之江河では、植生群落の構成は年度間で変動を伴いながらも、全体としては大きな変化は生じておらず、湿原植生は概ね安定した状態にあると考えられる。

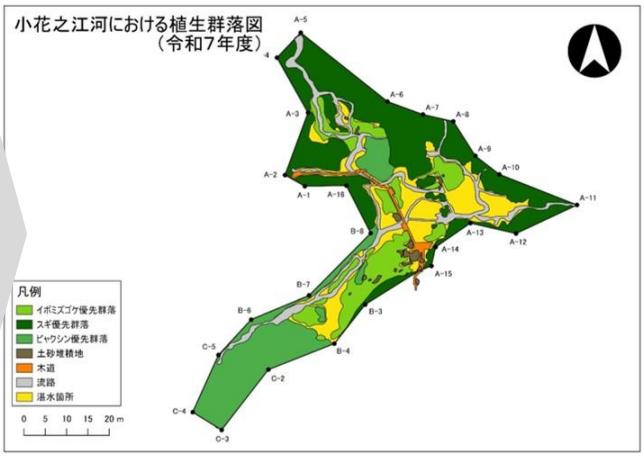
なお、花之江河では近年ササ類の侵入が確認されているのに対し、小花之江河では本調査期間を通じてササ類の侵入は確認されていない。

小花之江河における植生群落の経年変化

群落名	平成18年度		平成22年度		平成27年度		令和2年度		令和7年度	
	面積(㎡)	面積率(%)	面積(㎡)	面積率(%)	面積(㎡)	面積率(%)	面積(㎡)	面積率(%)	面積(㎡)	面積率(%)
スギを優占とする群落	147.1	5.4	151	5.5	151.1	5.5	560.5	20.5	568.2	20.8
ビャクシンを優占とする群落	758.5	27.8	726.5	26.6	762.5	27.9	755.7	27.7	757.0	27.8
ツゲを優占とする群落	407.6	14.9	407	14.9	408	14.9	0	0	0	0
ヤクシマシャクナゲ等を優占とする群落	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヤクシマダケを優占とする群落	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
イボミズゴケを優占とする湿原植生群落	511.00	18.7	557.90	20.40	482.20	17.7	477.80	17.5	506.30	18.5
湛水箇所の裸地を含む湿原植生群落	275	10.1	234.6	8.6	277.5	10.2	283.6	10.4	263.6	9.7
土砂堆積地	20.7	0.8	20.1	0.7	61.6	2.2	73.3	2.7	56.7	2.1
流路・溜池	551.9	20.2	574.7	21	528.9	19.3	520.9	19.1	520	19
木道	58.4	2.1	58.4	2.1	58.4	2.1	58.4	2.1	58.4	2.1
計	2730.2	100.0	2730.2	100.0	2730.2	100.0	2730.2	100.0	2730.2	100.0



平成 18 年度の植生群落



令和７年度の植生群落

【落ち葉だまり】

湿原の泥炭形成に寄与するとともに、ハベマメシジミの生息地として重要な役割を果たす落ち葉だまりについて、その分布状況および分布面積の経年変化を整理した。

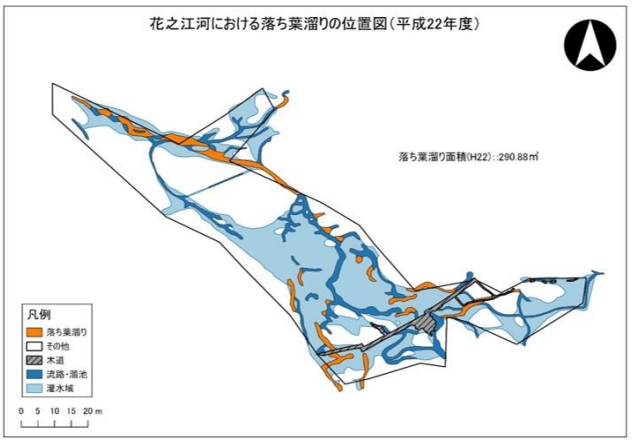
花之江河

●落ち葉だまりの分布状況

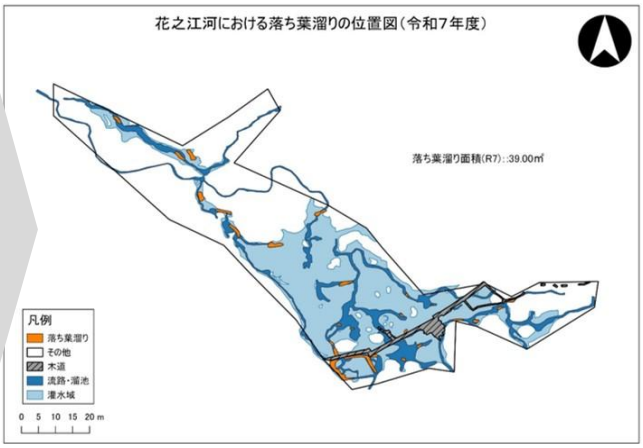
落ち葉だまりの分布箇所数は平成 22 年度以降、令和２年度、令和７年度大きな減少はみられず、増加傾向を示している。一方で、落ち葉だまり１箇所あたりの堆積面積は年々縮小しており、湿原全体としての落ち葉だまりの総面積は減少傾向にある。このことから、落ち葉だまりは湿原内に点在化・細分化しており、面的な広がりをもつ落ち葉だまりが減少している状況が確認された。

花之江河における落ち葉だまりの分布の推移

調査年度	土砂堆積地	
	箇所数	堆積面積
平成 22 年度	22 箇所	290.88m^2
令和 2 年度（平成 22 年度からの増減率）	18 箇所（1.2 倍）	74.61m^2（0.3 倍）
令和７年度（令和 2 年度からの増減率）	22 箇所（1.2 倍）	39.00m^2（0.5 倍）



平成 22 年度の落ち葉だまり



令和７年度の落ち葉だまり

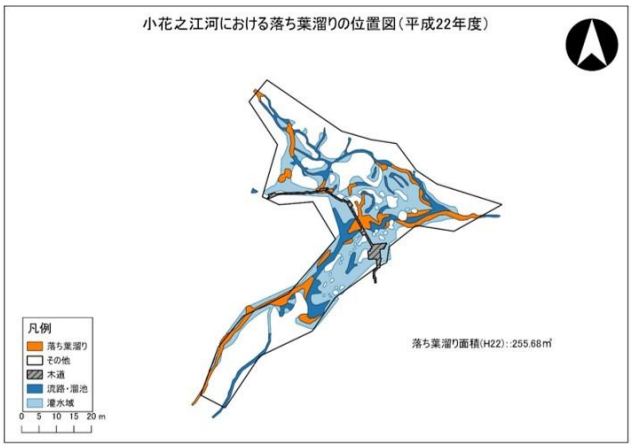
小花之江河

●落ち葉だまりの分布状況

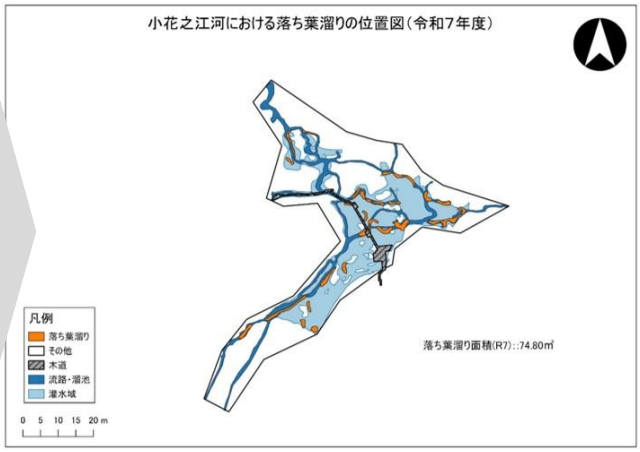
落ち葉だまりの分布箇所数は平成 22 年度から令和７年度にかけて増加傾向にあり、湿原内における分布は拡大している。一方で、総堆積面積は継続的に減少しており、１箇所あたりの落ち葉だまりの規模が減少している状況が確認された。

小花之江河における落ち葉だまりの分布の推移

調査年度	土砂堆積地	
	箇所数	堆積面積
平成 22 年度	16 箇所	255.68m^2
令和 2 年度（平成 22 年度からの増減率）	18 箇所（1.1 倍）	122.46m^2（0.5 倍）
令和７年度（令和 2 年度からの増減率）	24 箇所（1.3 倍）	74.80m^2（0.6 倍）



平成 22 年度の落ち葉だまり



令和７年度の落ち葉だまり

【５年ごとに実施しているモニタリングの考察】

屋久島世界自然遺産地域モニタリング計画で５年ごとに実施しているモニタリングについては、平成 22 年度に高層湿原の健全性を把握するため評価指標・基準を提案している。平成 27 年度からは、平成 22 年度と比較した評価を行っており、本年度も平成 22 年度の調査結果と比較した評価を行った

調査項目	評価指標	評価基準（案）	評価	
湿原区域（湿原面積）（流路や灌水域）	湿原流路と潅水域の状況と面積	・湿原流路や潅水域の位置や面積の経年変動を定量的に評価する。 ・モニタリング期間（5 年）内の変動値が 5%以内であれば既往の経年変化の範囲内である。	【R2】：黒字 【R7】：青字 調査実施回数５回（H18,H22,H27,R2,R7）	花之江河は大きな変化はなかった。小花之江河も大きな変化は無かったが、植生の生育に伴い、これまで流路・溜池及び湛水域だった箇所が、若干減少した傾向にある。両湿原ともに、変動値が 5%以内であった。 両湿原ともに、流路および湛水域の位置や面積は５年ごとの変動が５%以内に収まっており、既往の経年変化の範囲内で推移していると評価される。湿原区域全体としては、顕著な縮小や拡大は認めらない。
湿原堆積土砂量	土砂堆積地の状況と面積及び土砂堆積量	・土砂堆積地の位置や面積、土砂堆積量の経年変動を定量的に評価する。 ・モニタリング期間（5 年）内に流入土砂量が 1.0m^3 を超えた場合はその原因を究明し、必要に応じて対策を検討する。	【R2】：黒字 【R7】：青字 調査実施回数５回（H18,H22,H27,R2,R7）	花之江河の面積や堆積量は 0.97 倍と若干減少している。小花之江河の面積や堆積量は 1.2 倍の増加している。両湿原ともに、流入土砂量が 1.0m^{3}以内であった。 ただ、小花之江河木道中央部の堆積が顕著であり、シジミ生息域に影響していることが考えられるため、湿原保全検討会で議論後、関係行政機関において、対策の検討を行うこととした。 両湿原ともに、５年ごとの流入土砂量は１．０m3 未満であり、評価基準を満たしている。一部区間では局所的な堆積の増減が確認されるものの、全体としては一時的な変動の範囲にとどまっている。
湿原植生群落ごとの面積	湿原植生群落の分布状況と面積	・各植生優占域の位置や面積の経年変動を定量的に評価する。 ・モニタリング期間（5 年）内の変動値が植生種で 5%以内であれば既往の経年変化の範囲内である。	【R2】：黒字 【R7】：青字 調査実施回数５回（H18,H22,H27,R2,R7）	花之江河、小花之江河ともに、群落面積の大きな変化はみられなかった。一方、花之江河では、イボミズゴケ群落だった場所に、ヤクシマダケがパッチ状に 4 箇所生育していた。ササの侵入の状態は乾燥化を示す指標となりうることから、引き続きモニタリングが必要と思われる。小花之江河ではヤクシマダケは確認していない。 両湿原ともに、植生群落の面積変動は５%以内で推移しており、群落構成に大きな変化は認められない。花之江河では一時的にヤクシマダケの侵入が確認されたが、拡大傾向はみられない。

調査項目	評価指標	評価基準（案）	評価	
ハベマメシジミ	固定調査地点における生息状況 落ち葉だまり （面積と位置）	・単位面積あたりの生息数の経年変動を定量的に評価する。 ・モニタリング期間（5年）内の変動値が50%以内であれば既往の経年変化の範囲内である。 ・上記以外の場合は調査地点を増やし、周辺生息域の傾向や原因の究明を行なうこと。	【R2】：黒字 【R7】：青字 調査実施回数5回 （H18,H22,H27, R2,R7）	小花之江河のコドラートⅠでのみで確認した。 両湿原ともに落ち葉溜り面積は減少しており、特に花之江河での減少が顕著であることから当該種の生息確認減少にも影響していると考えられる。コドラート、概況調査ともに変動値は50%を超えている。このため生息適地と思われる箇所で概況調査を実施したが確認はなかった。 減少の要因としては、湿原内の排水が進んだことで、落ち葉やデトリタスが溜まりにくい環境となったことが考えられる。 以上につては、湿原保全検討会で議論後、関係行政機関において、対策の検討を行うこととした。 両湿原ともに、落ち葉だまりの分布箇所数は増加または横ばいで推移しているものの、Ⅰ箇所あたりの堆積面積は縮小しており、落ち葉だまりは細分化・点在化する傾向が認められる。

（カ）試行的保全対策箇所の土砂・枝条等の堆積状況のモニタリング調査

河床低下や流路の拡幅が生じている花之江河において、緩やかに土砂等を堆積させて河床低下の進行を回避すること、及びその効果的な方法を検証するため、令和元年より丸太木柵工の設置による試行的対策を継続している。設置箇所は河床低下が進み、レキが表面に現れている流路（Ⅰ流路）を対象とした。

設置から約６年が経過しする中で、引き続き丸太木柵工の設置効果を評価し、今後の湿原保全対策に資することとした。

結果としては、試行的保全対策で設置した丸太木柵工の上流側３箇所すべてにおいて、砂礫や枝条等の堆積が継続して進行し、その上に水生植生の定着および生育拡大が確認された。これにより、河床の安定化が少しずつ進んでいるものと考えられる。

また、ドローン撮影により取得した標高データ（３cm 単位）を用いて、丸太木柵工の設置前（R 元年）および設置後（R２年～R７年）の河床変化を可視化（グラフ化）したところ、設置箇所における河床勾配は経年的に緩和する傾向が確認された。

試行的保全対策（丸太木柵工）の設置箇所

①丸太木柵工 01 のモニタリング結果

【設置から５年目】
令和５年６月 27 日、晴れ

・丸太木柵工の上流、下流側共に植生の生育範囲が広がりつつある。
・水たたき部及び側壁の侵食は見られない。
・３つの席の内、最も設置効果が現れ、路床が上昇している。

【設置から７年目】
令和７年７月９日、曇り

・３つの堰の内、最も効果が表れており、丸太木柵工の上流下流側とも、湿原面近くまで土砂が溜まっている。
・流路際ではミズゴケの生育が拡大しており、その結果、流路幅が狭まったように見受けられる。イの生育が旺盛であり、草丈が高くなっている。
・水たたき部及び側壁の侵食は見られない。

②丸太木柵工 02 のモニタリング結果

【設置から５年目】
令和５年６月 27 日、晴れ

・丸太木柵工の上流、下流側共に植生の生育範囲が広がりつつある。
・水たたき部の侵食が４０ｃｍ程度になっている。昨年よりも約５ｃｍ深くなった。
・水たたき部及び側壁の侵食は見られない。

【設置から７年目】
令和７年７月９日、曇り

・丸太木柵工の上流側では植生の生育範囲がさらに拡大しており、これに伴い枝条や土砂の堆積が進んでいる。その結果、路床と湿原面との高低差は縮小しつつある。
・水たたき部及び側壁の侵食は見られない。

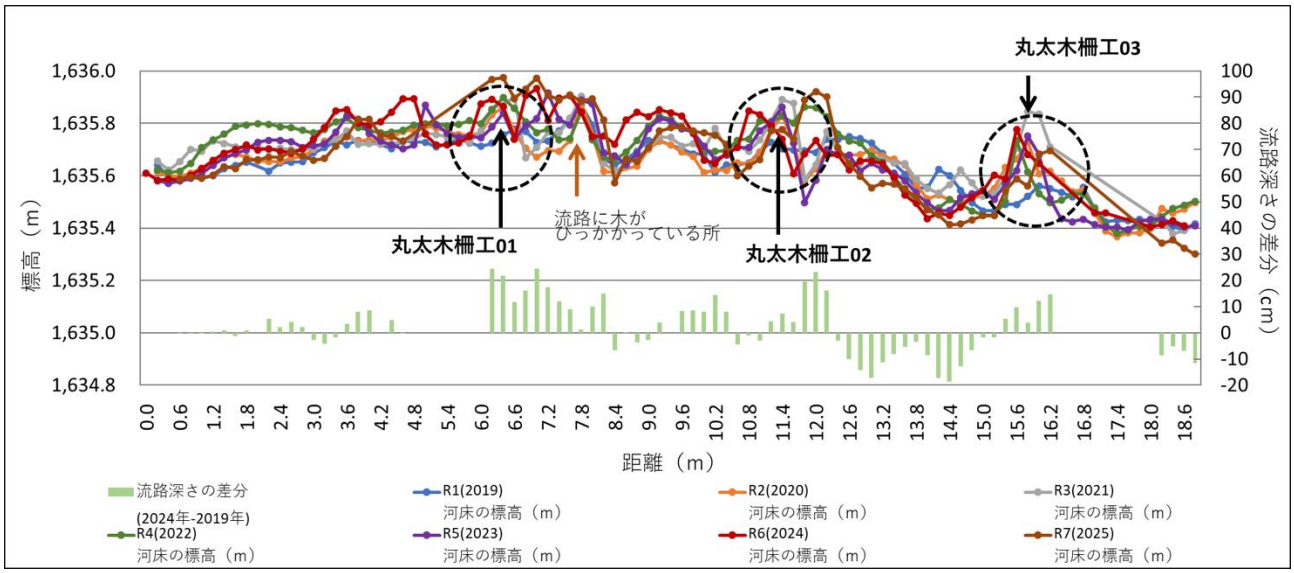
③丸太木柵工 03 のモニタリング結果

【設置から５年目】
令和５年６月 27 日、晴れ

・丸太木柵工の上流、下流側共に植生は生育しているが、範囲は広がっていない。
・水たたき部の侵食が４５ｃｍ程度になっている。昨年よりも約５ｃｍ深くなった。
・水たたき部及び側壁の侵食は見られない。

【設置から７年目】
令和７年７月９日、曇り

・丸太木柵工の上流側では、新たな土砂の堆積および水生植生の繁茂が広がっており、路床と湿原面との高低差は縮小しつつある。
・水たたき部の深さは昨年度から大きな変化は認められない。ただし、降雨時には土砂の移動が生じるため、計測時期によって数値にばらつきがあると思われる。
・水たたき部及び側壁の侵食は見られない。



河床勾配の推移

（キ）保全対策実施計画書の作成

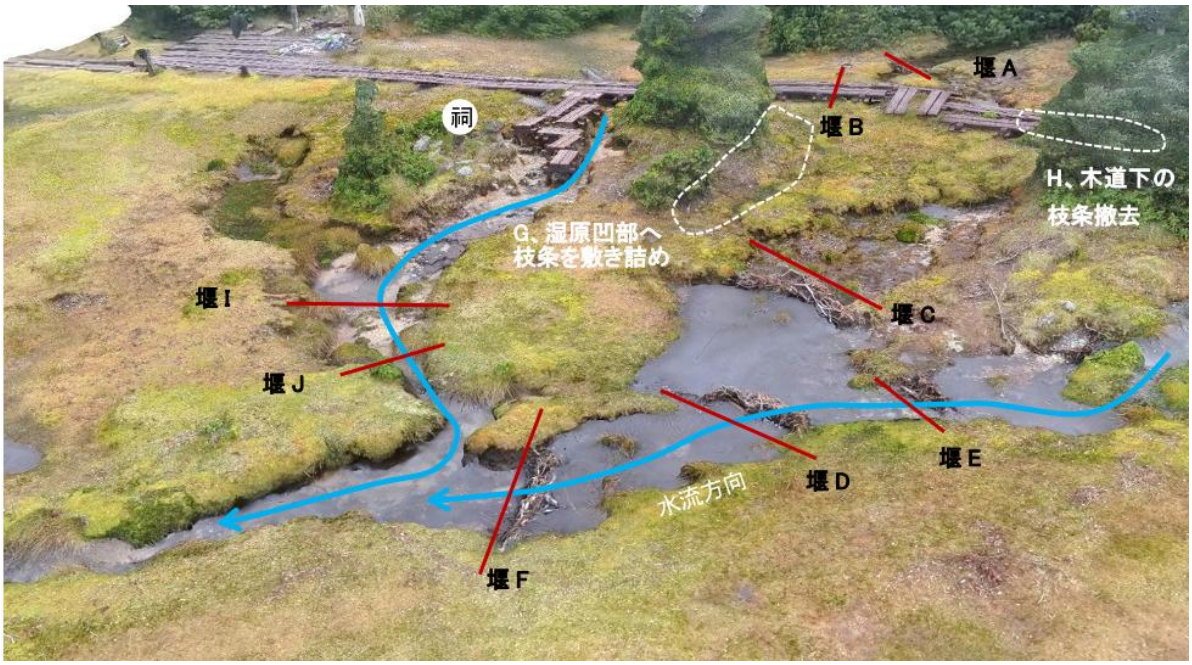
平成 30 年度～令和４年度までの５年間をかけて策定した「屋久島湿原保全対策」に基づき、「保全対策実施計画書」の作成を令和５年度より進めている。進め方としては、事業開始段階から「屋久島湿原保全対策」に関わってきた有識者（２名）の助言を受けつつ、計画内容の具体化および整理を行っている。また、環境省事業においても流水分散対策の検討が段階的に進められており、その検討状況を踏まえつつ、保全対策実施計画書との整合を図っている。このため、保全対策実施計画書の項目を一部見直した。

（ク）令和５年度及び６年度に保全対策として実施した侵食防止対策及び流水分散対策箇所のモニタリングと評価

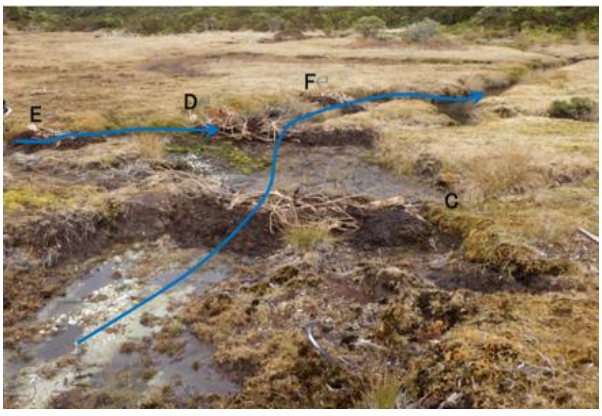
令和５年度は花之江河の植生保護柵撤去に伴い応急的あるいは試行的保全対策として、流水分散対策及び侵食防止対策を実施しており、令和６年度から対策箇所のモニタリングを実施して保全対策効果を検証した。

対策箇所と内容

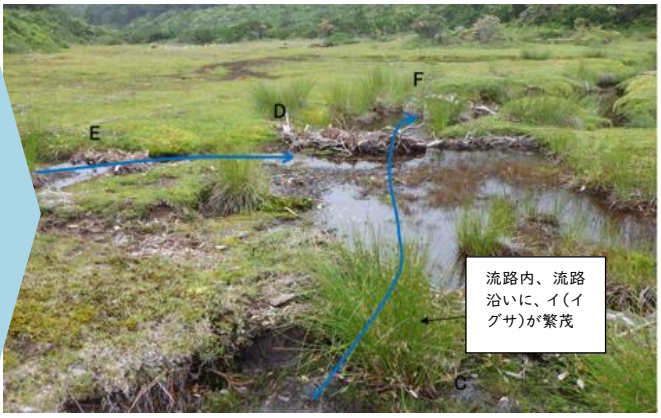
対策箇所	対策内容	対策年度
堰 A,B	木道下に堰（透過性）を入れて、祠方向への流れを分散させる	R5
堰 C,D,E,F	堰（透過性）を入れることで水勢を緩和する。また、土砂や枝条の集積を促して側壁や路床の侵食を緩和する	R5
G	湿原表面の凹部を枝条で覆い、流水による侵食を緩和する ※対策から６か月後には流出しており、モニタリングはしていない	R5
H	木道下の土砂や枝条を撤去し、流水の疎通能力の回復をはかる	R5
堰 I,J	堰（透過性）を入れることで水勢を緩和する。また、土砂や枝条の集積を促して側壁や路床の侵食を緩和する	R6



対策箇所

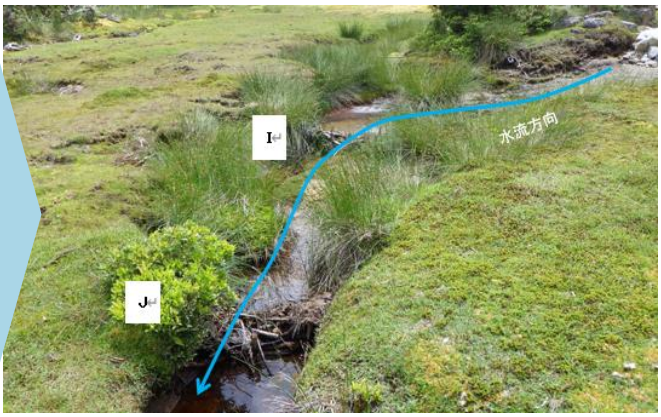


堰 CDEF の設置直後（2023/11/28 撮影）



堰 CDEF の設置から約１年８か月経過（2025/7/9 撮影）

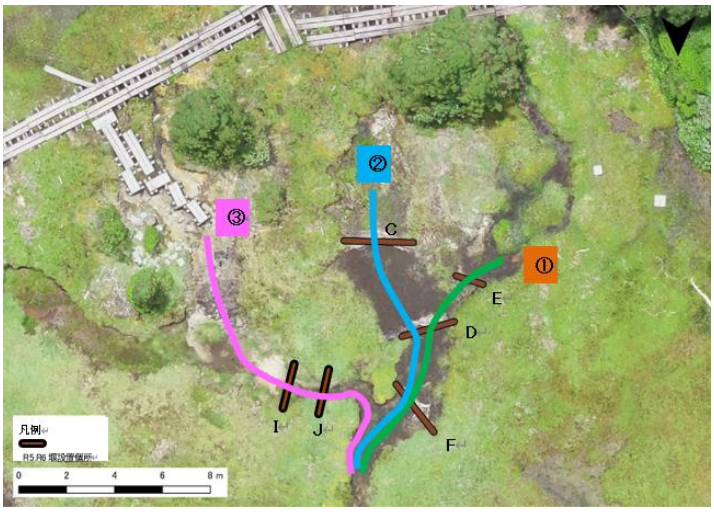
堰 H,I 設置直後（2024/11/20 撮影）



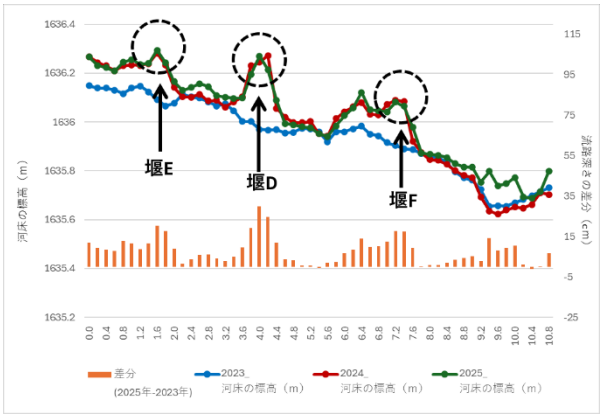
堰 H,I の設置から約８か月経過（2025/7/9 撮影）

【対策前後の比較（モニタリング結果）】

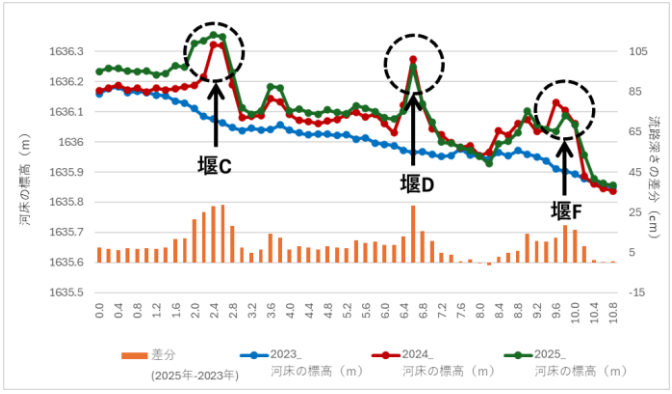
2025 年７月９日にドローン測量を行った。そこで得られた標高データから、堰設置前後の路床高さの比較をした。堰設置前のデータは 2023 年７月 28 日に計測した標高データを使用している。



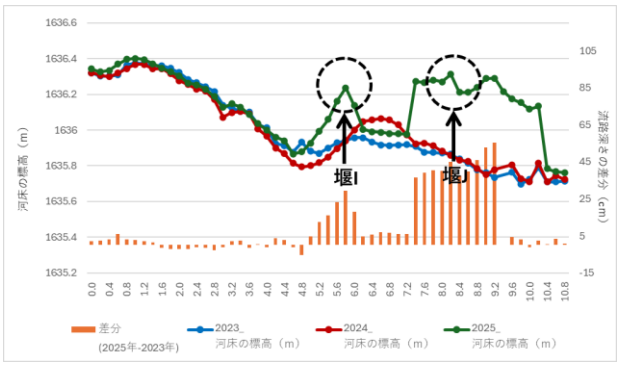
縦断図を作成した流路①②③



流路①の河床変化



流路②の河床変化



流路③の河床変化

結果としては、

・堰C・D・E・F および堰Ⅰ・Ｊの上流側では、前年と比較して数 cm 程度の路床上昇が確認された。
・堰上流部では土砂や枝条の堆積が進行し、微地形の盛り上がりが複数箇所で形成されていた。
・下流側では顕著な路床低下や新たな侵食は認められず、堰設置による流下域の不安定化は確認されなかった。
・令和６年度に設置した堰Ⅰ・Ｊについても、設置後１年で上流側に堆積が進み、短期間で機能が発現していることが示唆された。
・標高データの比較から、堰設置により上流側を中心とした局所的な堆積と路床の緩やかな上昇が確認された。

2. 森林生態系保全

（1）著名木の樹勢診断（龍神杉）

(カ)目的

著名屋久杉のうち、外見上で樹勢が衰えた樹木等を中心に現地調査を行い、被害発生の原因究明と今後の保護対策や改善策を検討することを目的としている。

(キ)調査対象木

龍神杉」は標高 1,276m、崩川上流の北向き斜面尾根近く、龍神杉登山道（益救参道）沿いにある。樹高及び胸高周囲は、26.8m・10.4m となっている

龍神杉

(ク)総合診断

●周辺環境の影響

立地は北北東向きの急傾斜地で、大雨等による土砂流出被害が懸念される。下層植生の草本類は乏しく野生動物（シカ等）の影響と考えられる。

●根系・根元、大枝・幹、樹冠・枝葉の状況

根元は三か所の開口部があり大きな空洞が確認できる。又、北東方向に露出した根があり、４m 程離れた所に根を下ろしている。根元は腐朽している箇所も確認できるが、腐朽部には不定根が発達している箇所や腐朽部の巻き込みも確認できる為、腐朽の進行は落ち着いているか非常に緩やかであると推察できる。根元は良く発達しており、特に北側は隆起している箇所も多くみられる。根元の状況から根系は良く発達していると考えられる。地表面には花崗岩の露出が多数みられ、龍神杉の露出した根系の状況や空洞の状況から過去に降雨による表土の流出があったと考えられる。

西側根元の空洞

東側根元の空洞

北側根元の空洞

南側　幹腐朽の状況

枝の分岐部から根元にかけて幹部に腐朽があり、腐朽は心材にも達していると考えられるが、周辺の材が発達し盛り上がり、巻込みも確認でき、腐朽の進行は止まっているか、もしくは非常に緩やかであると考えられる。大枝枯の痕跡があるが、巻込みが確認できる。幹は北北東側へ（斜面下方向）へ 18 度程度傾斜している。大枝は東側、北側、西側へ多く伸びており、幹の傾斜方向へ枝のバランスが偏っている。

枝葉の状況(北側から撮影)

樹冠は全体的に広がりがあるが、特に東側、北側、西側にかけて大きく広がっており、南側が少なくなっている。被圧の無い上部は枝葉が多く確認でき、枝先枯れも少ない。葉の大きさは全体的にやや小さく、伸長量もやや少ないが葉色も濃い緑色を保っており緑量も多い。

●考察及び総合判断

幹の枝分岐部から根元にかけて、心材にも腐朽があると考えられる。根元の空洞の主な原因は周辺状況や龍神杉の露出した根系、水流の痕跡等から、過去の大雨等により表土が流出した事と考えられる。表土の流出による根系の露出は支持力不足により根返りや幹折れの危険性を高める。

当該木は根元の空洞や幹や根元の腐朽があるが、枝葉も多く、幹等も良く発達している箇所が見られることから、衰退度はⅡのやや不良と判断でき、今後も活力を維持することは十分可能である。周辺環境を整える事と幹部や根株の腐朽を進行させない事を優先課題とし、対策を検討する。

【処方箋】

・土壌改良と発根促進…現状では土壌改良の必要性はない。
・樹冠部の処理…腐朽については、腐朽の現状を考慮し経過観察とする。
・剪定・支柱等の措置…必要なし。
・特記事項…特になし。
・保全計画…定期的な調査を行い、樹勢や樹形、腐朽部の状況、周辺環境等の確認をし、対応策の検討を行う。

(2) 倒伏した弥生杉周辺のモニタリング調査

(ア)目的

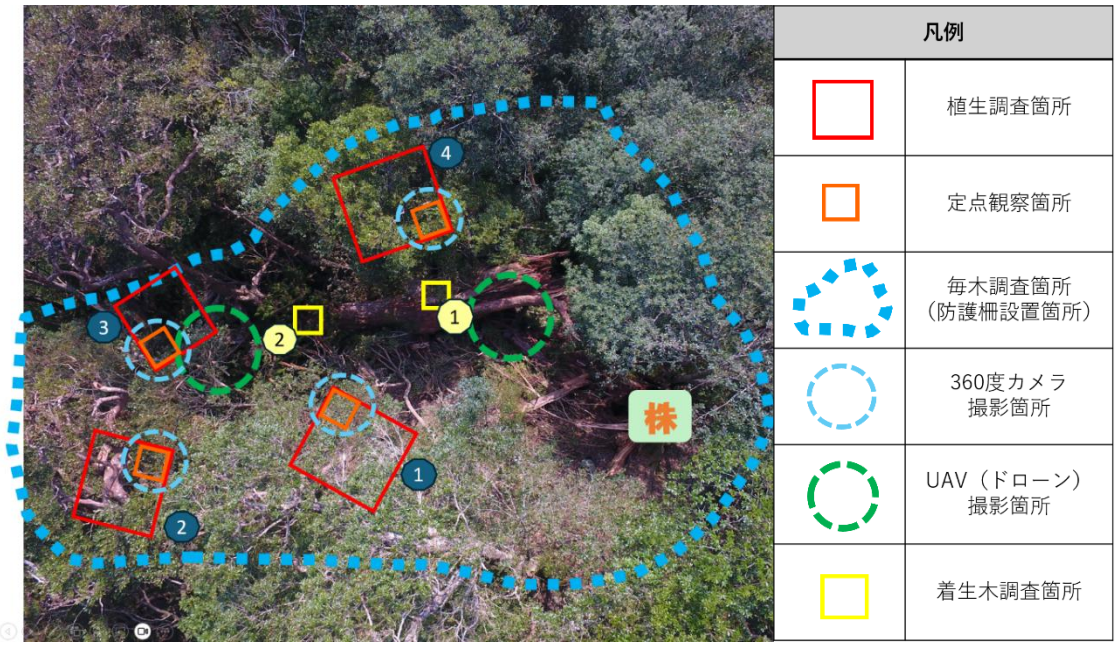
令和６年８月 28 日から 29 日にかけて襲来した台風 10 号の影響により倒伏した弥生杉は、有識者及び関係機関等を交えて開催した「弥生杉の今後の取扱に係る検討会」において、倒伏した姿や新たな命が芽吹き更新する様子など、自然の推移に委ね現地が変化していく状況を観ることができる場所として、次の世代に伝える森林環境教育の場や観光資源として活用することが決まった。以上の経緯により当年度から、倒伏した弥生杉周辺のモニタリング調査を開始した。

(イ)調査項目

① プロット内の植生調査及び定点観察
② 植生保護柵内の毎木調査
③ 着生木の状況調査
④ 空間閉鎖状況調査
⑤ 定点カメラ
⑥ 株の腐朽状況と着生状況の調査

活発な意見が交わされた検討会

(ウ)調査設定箇所



(エ)調査方法と結果

①プロット内の植生調査及び定点観察

方法：防護柵内の４箇所にプロットを設定（200 ㎝四方）。調査対象は、木本類のみとし（草本類は除く）樹種・樹高・本数を計測する。調査対象木の測定方法は、地際から 10 ㎝以上の樹種の高

さを計測。また、定点観察として、プロット内の一角に 50 ㎝四方のプロットを設定し撮影する。撮影箇所の目印として中心に杭を設置。

結果：樹木の植生は、弥生杉の倒伏以前から生育する樹木が植生の主となっており、新しく侵入している樹木は少ない。また、現況は、草本の植生が優位だが、裸地部分が多く目立つ結果であった。植生調査の結果については表で示す。

定点観察箇所の様子（③）

樹種	本数	平均樹高（cm）	樹種	本数	平均樹高（cm）
	プロット１			プロット２	
カラスザンショウ	6	17.6	ヒサカキ	5	19.4
アカメガシワ	2	15.5	ホソバタブ	6	19.5
イヌガシ	3	38.3	イヌガシ	4	17.2
			ハリギリ	3	13.3
			ヤクシマカラスザンショウ	3	17.3
			タイミンタチバナ	4	17.5
			アカメガシワ	1	22.0
			不明①	1	15.0
			不明②	1	20.0
			不明③	1	11.0
	プロット３			プロット４	
バリバリノキ	1	31.0	ホソバタブ	2	12.5
ヤブツバキ	1	119.0	ヒサカキ	2	18.5
イヌガシ	7	43.4	ヤブニッケイ	1	500.0
ヒサカキ	2	73.0	イヌガシ	3	164.0
イスノキ	1	30.0	サクラツツジ	1	10.0
ハイノキ	2	319.0	ハイノキ	3	103.0
ホソバタブ	2	17.0			

②植生保護柵内の毎木調査

方法：対象木を胸高直径 4 ㎝以上とし、樹種名を記録する。針葉樹については、樹高も記録する。

結果：19 種 128 本の樹木を確認できた。詳細については表で示す。

樹種	本数	樹種	本数
ウラジロガシ	4	シキミ	1
ヒメシャラ	1	ハイノキ	11
サカキ	5	マテバシイ	3
サクラツツジ	29	ヤブツバキ	10
イスノキ	8	ヤブニッケイ	10
イヌガシ	16	アカガシ	4
タイミンタチバナ	8	バリバリノキ	2
クロバイ	1	カクレミノ	1
ヒサカキ	12	樹種不明	2

③着生木の状況調査

方法：弥生杉上の 2 箇所にプロットを設定（50 ㎝四方）。新たに着生・更新する樹木を対象に調査を実施。範囲内の状況をカメラにて撮影（樹種等が分かれば記載する）。

結果：着生木は見られなかったが、コケが着生しており、今後繁茂すれば種子落下後の発芽に繋がる可能性がある。

着生木調査箇所の様子（②）

④空間閉鎖状況調査

方法：UAV を使用し上空 25ｍ地点から空間閉鎖状況を撮影し記録する。また、地上から 360 度カメラを使用した空間閉鎖状況を記録する。

結果：下記の写真により結果を示す。

UAV による空間閉鎖状況調査

360 度カメラによる空間閉鎖状況調査

⑤定点カメラ

方法：定点カメラを山側と谷側に設置し、動体を感知し撮影を実施。

結果：野生動物（ヤクシマザル）を確認。

谷側の定点カメラに映るヤクシマザル

弥生杉の株の状況

⑥株の腐朽状況と着生状況の調査

方法：株の腐朽状況と着生状況を目視と写真によって記録する。

結果：倒木時から特段の変化は見られなかった。

(3) 森林パトロール

(ア)地域連携推進等対策事業（グリーン・サポート・スタッフ）

林野庁は、自然性の高い天然生林において、入込み者の増加や登山利用の集中化・大衆化等に伴う植生荒廃や森林機能の低下を未然に防止するため、森林保護員（グリーン・サポート・スタッフ）による森林パトロールを実施しており、平成18年度から地域連携推進等対策事業を実施している。

本事業では、屋久島のかけがえのない自然環境を将来にわたり保全するため、森林生態系の厳正な保護と周辺地域を含めた森林環境の適切な保全・管理を推進している。具体的には、世界自然遺産地域を含む屋久島の登山道等において巡視活動を行い、登山道の軽微な補修や植生状況の把握、登山者への安全指導及び利用マナーの啓発等に取組んでいる。

注意標識の設置

歩道上の倒木処理

（イ）入林者増加期の職員によるパトロール

●シャクナゲ開花時期のパトロール

シャクナゲの開花が予想される時期に合わせて、高山植物等の盗掘防止の呼びかけや登山マナーの普及啓発活動を継続的に行っている。令和７年度は、例年より早く梅雨期を迎え前半は雨が続いたこともあり、予定路線すべてのパトロールは出来なかったものの、後半は天候に恵まれ、予定路線４コースの内２コースにおいて実施することができた。太忠岳コースで 25 名ほど、宮之浦岳コースでは 50 名以上の登山客でにぎわいを見せていた。シャクナゲの開花を待ちわびた登山者は、屋久島の雄大な自然に触れられて満足そうだった。今回初めて参加する職員もおり、屋久島の森林の現況や登山者の状況把握など多くの知見を得ることができたパトロールになった。

【パトロール期間】５月 28 日(水)～６月６日（金）
【パトロール日数及び人員】
①宮之浦岳コース‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ ２日間（７人）
②黒味岳コース‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 実績なし
③永田岳コース‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 実績なし
④太忠岳コース‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ １日間（３人）

投石平周辺のヤクシマシャクナゲ

●夏休み期間中の森林パトロール

夏休み期間中は、登山者の増加が見込まれることから、登山客へマナーの呼びかけを行っている。例年、屋久島森林管理署と合同で実施しているが、今年度は環境省屋久島事務所とも連携・協力し実施した。また、猛暑日が想定されたため、熱中症対策を万全に行い、８月下旬から９月上旬へ期間をずらして実施した。太鼓岩コースでは、120 名の登山者を確認することができた。シャクナゲ開花時期のパトロールを含め、マナーやルールを無視した登山者など異常は見られなかった。

【パトロール期間】８月 26 日（火）～９月 10 日（水）
【パトロール日数及び人員】
①　宮之浦岳コース‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ １日間（３人）
②　黒味岳コース‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ ２日間（７人）
③　永田岳コース‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ １日間（４人）
④　太忠岳コース‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ １日間（３人）
⑤　縄文杉コース‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ １日間（３人）
⑥　太鼓岩コース‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ ２日間（８人）

黒味岳から宮之浦岳を望む

(4) ヤクシカ対策

(ア)屋久島世界遺産地域科学委員会ヤクシカ・ワーキンググループ

第１回目の会議は令和７年７月７日、第２回目は令和８年２月５日に開催され、ヤクシカの生息状況、捕獲等の被害防止対策、森林生態系の管理目標及びその他植生モニタリング、特定エリアの対策（西部地域)、屋久島世界遺産地域モニタリング計画の改訂等について報告と議論が行われた。

※会議の資料や議事録は九州森林管理局 HP に掲載

https://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/fukyu/shika/yakushikaWG_kaisaijyoukyou.html

・ヤクシカの推定個体数は、前年度と比較し、概ね横ばいである。
・捕獲数は年々減少している。

調査地点数と推定個体数（平均及び 95%信頼区間上限値）の推移

年度	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
糞粒調査地点数	35	35	35	35	35	38	38	38	38	38
推定個体数（頭）	16,968～28,374	11,300～15,930	13,390～20,260	9,540～14,690	12,240～18,100	12,550～16,670	10,380～15,470	14,730～20,850	7,100～13,790	7,050～20,690

ヤクシカ WG 資料（鹿児島県）

屋久島におけるヤクシカの捕獲数の推移

捕獲年度		H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
有害	国有林外	2,861	2,409	2,500	2,352	2,132	2,043	1,963	1,675	1,549	1,557
	国有林内	403	427	192	174	159	213	207	167	158	61
狩　猟		3	22	107	11	28	13	5	17	9	1
合　計		3,267	2,858	2,799	2,536	2,319	2,269	2,175	1,859	1,716	1619

(イ)局委託調査への協力

九州森林管理局が委託契約する「野生鳥獣との共存に向けた生息環境等整備調査(屋久島地域)」においては、ヤクシカの生息、移動状況や被害の状況等を把握した上で、植生の保護・再生方策、ヤクシカの個体数調整方策を含むヤクシカに関する総合的対策を検討・実施することとなっており、当保全センターでは、受託者と連携を図りつつ各種調査等の指導・助言及び調査協力を行った。

また、委託調査で報告されたカンカケの植生保護柵の破損個所について、当保全センターにおいて補修を実施した。

(ウ)有害鳥獣捕獲等

ヤクシカの適正な生息頭数目標に向けて国有林内で実施している職員による有害鳥獣捕獲を令和７年度も屋久島森林管理署（鍋山林道)、当保全センター（船行林道）で実行し、捕獲頭数は６頭であった。

3. 気象モニタリング

(ア) 目的

屋久島では、年間 4,000～10,000 ㎜に達する降雨があり、花崗岩特有の表層の浅い地域が多いこと等から、山腹崩壊、土砂流出等の山地災害も多く発生している。

また、標高０ｍ～1,900ｍに達する海岸線から奥岳に至るまでの標高差の中において、多種多様な動植物が生息している。

これらのことから、国有林の要所に雨量計及び温度計を設置して常時観測を行い、永続的なデータとして、森林生態系の研究に資することを目的として観測を行っている。

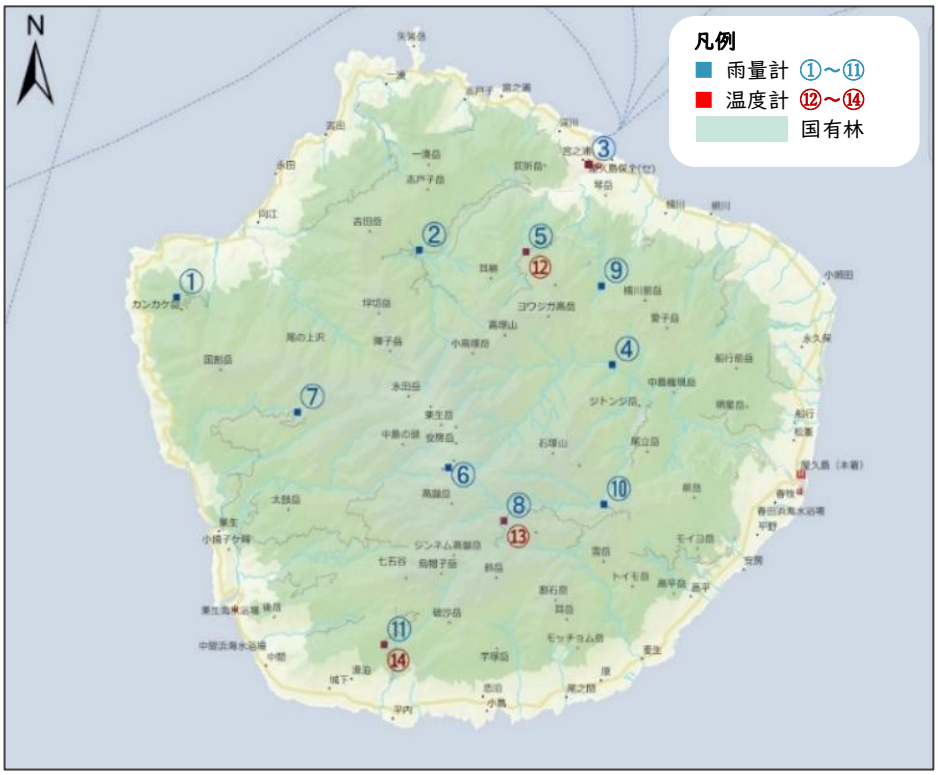
※この雨量及び温度観測は気象業務法第６条１項１の研究のために行う気象の観測となっている。

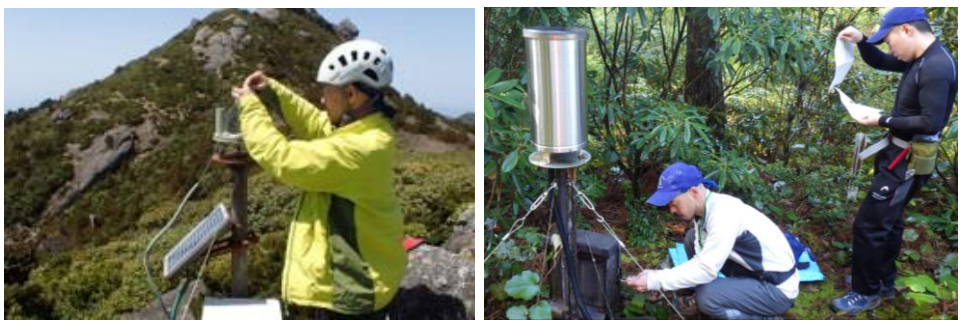
(イ) 観測体制

データの回収・機材の点検等については、職員で定期的に行っている。

(ウ) **観測地**　図１、表１

図１　雨量計･温度計設置箇所位置図





職員による雨量計（転倒マス）の清掃

表１　雨量計・温度計　設置箇所一覧表

機器	番号	設置箇所	標高	備考
雨量計	①	永田カンカケ岳付近	730ｍ	H12.07.12 設置
	②	宮之浦林道 233 支線	460ｍ	H08.03.26 設置　H29.1 に 800m 下流に移動
	③	屋久島森林生態系保全センター	5m	H07.08.31 設置
	④	小杉谷事業所跡	680ｍ	H08.02.07 設置
	⑤	白谷林道 220 支線	650ｍ	H09.11.11 設置　H24.2 白谷から移設
	⑥	黒味岳頂上付近	1,800ｍ	H08.05.31 設置
	⑦	大川林道	1,020ｍ	H08.02.01 設置
	⑧	淀川登山口	1,380ｍ	H07.12.25 設置
	⑨	白谷雲水峡	630ｍ	H12.05.10 設置
	⑩	ヤクスギランド	1,000ｍ	H11.03.17 設置
	⑪	湯泊林道	424ｍ	H31.02.12 設置　（令和４年３月 11 日移設）
温度計	⑫	白谷林道 220 支線	650ｍ	H23.02.18 設置
	⑬	淀川登山口	1,380ｍ	H26.02.21 設置
	⑭	湯泊林道	424ｍ	H22.11.16 設置　（令和４年３月 11 日移設）

（ケ）気象観測結果

●降水量データ

月別降水量（令和７年/単位:mm）

最大値：全ての値から。平均値：欠測箇所を除く

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
最大値	338	471	777	487	1,847	1,000	2,502	829	915	3,061	300	426
平均値	202	230	411	274	850	612	1,365	502	537	1,333	136	256

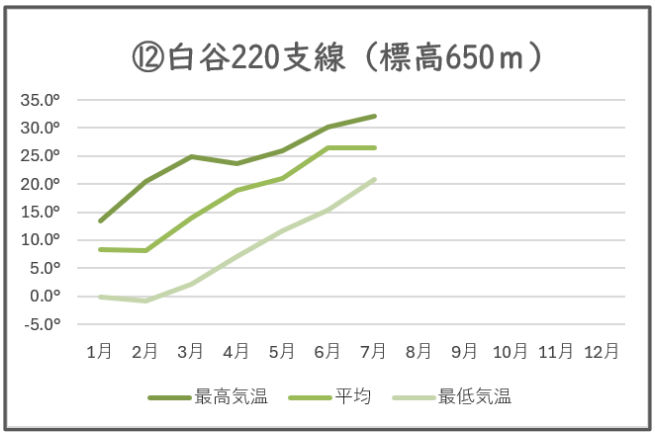
月別・地点降水量（令和７年/単位:mm）

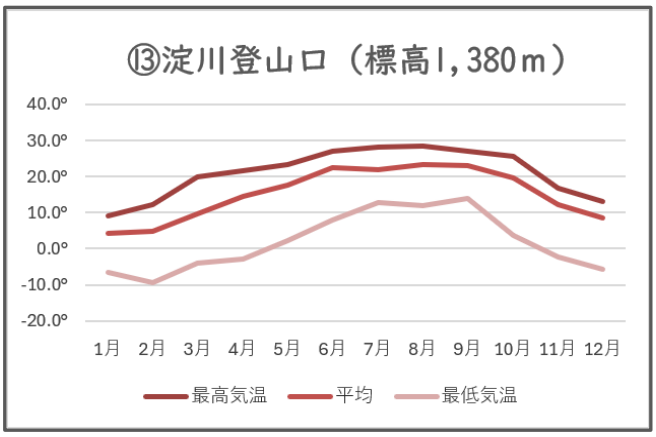
ーは欠測、#は期間中に欠測のあることを示す。計：欠測箇所を除く

観測地点＼月	標高	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
①カンカケ岳	730m	156	113	206	180	460	471	349	348	392	161	49	156	3,041
②宮之浦林道	460m	338	294	126	225	790	543	1,013	367	436	1,918	152	230	6,432
③保全センター	5m	183	184	160	214	464	308	1,085	244	308	1 #	ー #	ー #	3,151 #
④小杉谷	680m	ー #	ー #	ー #	ー #	ー #	ー #	ー #	ー #	ー #	ー #	ー #	ー #	0 #
⑤白谷林道220支線	650m	270	193 #	ー #	ー #	ー #	0 #	1,187	281	385	3,061	146	211	5,734 #
⑥黒味岳	1800m	70	91	377	203	523	556	1,803	539	523	2 #	90 #	163	4,940 #
⑦大川林道	1020m	223	203	471	296	702	791	1,045	619	622	404	63	299	5,738
⑧淀川登山口	1380m	247	334	678	462	1,406	930	2,502	829	765	1,299	168	348	9,968
⑨白谷雲水峡	630m	ー #	ー #	ー #	ー #	766 #	465	1,465	9 #	ー #	ー #	ー #	122 #	2,827 #
⑩ヤクスギランド	1000m	211	471	777	487	1,847	1,000	2,107	672	915	2,220	300	426	11,433
⑪湯泊林道	580m	120	148	492	124	604	448	1,095	620	491	266	72	218	4,698

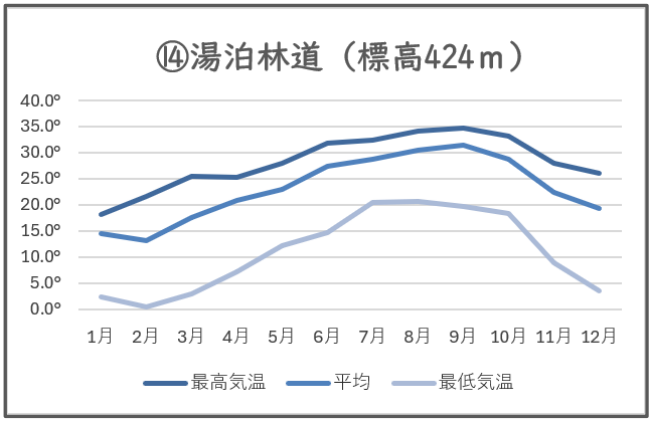
●気温データ

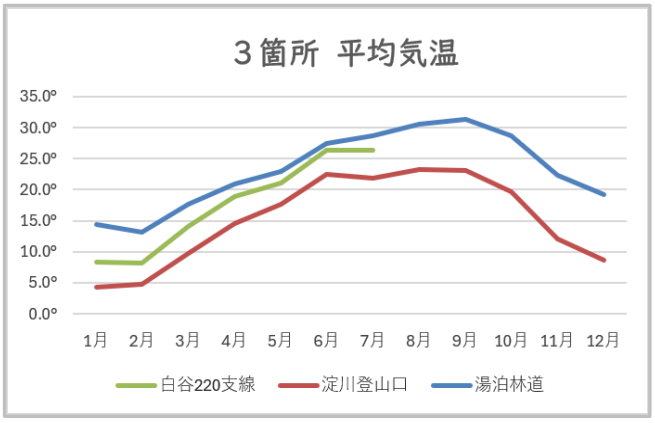
月別気温（令和７年/単位:℃）





※８月以降欠測（データ異常）





Ⅲ 普及教育・森林空間利用

1. 森林環境教育の実施

（1）屋久島高等学校

【実施日】令和７年６月 17 日（火）**【場　所】**屋久島高等学校
【参加者】１年生 54 名
【内　容】登山上のルールやマナー及び自然環境へ配慮した携帯トイレの使用方法について説明を行う。また、白谷雲水峡太鼓岩登山ルートの見どころ等の説明を行い、屋久島の貴重な自然環境についても講義を行った。

登山の注意事項を聞く生徒

（2）島外の高等学校

①　大分舞鶴高等学校（大分県）/スーパーサイエンスハイスクール指定校

【実施日】令和７年 10 月１日（水）**【場　所】**屋久島総合自然公園外
【参加者】理数科１年生 18 人
【目　的】野生生物の調査活動を通し、２年次の課題研究で必要とされる実践的な基礎調査技能や将来の科学系人材としての能力や態度を育成する。
【内　容】屋久島総合自然公園内で、植物を観察しながら屋久島世界自然遺産地域の概要や現状と問題点等について、ヤクシカの食害による生物多様性への影響や外来種のアブラギリが固有種と競合することによる生態系への影響等について説明を行った。

ヤクシカの食害等について説明

②　湯梨浜学園高等学校（鳥取県）/スーパーサイエンスハイスクール指定校

【実施日】令和７年 11 月 18 日（火）**【場　所】**屋久島森林生態系保全センター
【参加者】２年生 19 名
【目　的】野生鳥獣による森林被害対策等が進んでいる屋久島において、実践的な調査手法や対策方法等を学び、環境保全に進んで取組む科学的な人材育成をする。
【内　容】屋久島の森林と当保全センターの業務概要を説明し、ヤクシカによる被害状況や職員による捕獲等について、笠松式くくり罠の実演を交えて説明した。

ヤクシカの被害対策について説明

③　日田林工高等学校（大分県）

【実施日】令和７年 12 月 25 日（木）**【場　所】**白谷雲水峡
【参加者】林業科２年生４人
【内　容】倒伏した弥生杉について現地で現況等の説明を行った。その後、保全センターにて弥生杉が倒伏した経緯やモニタリング調査など今後の取組みを中心に説明。また、当保全センターに掲示している古写真やヤクスギ円盤、ヤクスギ土埋木の搬出についての記録映像などを視聴しながら説明を行った。

弥生杉について説明

(3) 小中学校森林教室

①　中央中学校

【実施日】令和７年５月 30 日（金）**【場　所】**中央中学校
【共　催】屋久島森林管理署　　**【参加者】**３年生 54 名
【目　的】林業の流れが体系的に学べるよう、森林施業内容について体験を交えながら、卒業までの３年間で一巡する森林教室を試行的に行っている。
【内　容】今までの森林教室を振り返りつつ、「森林に何を期待するか」をテーマに、「期待すること」と「解決方法」についてディスカッションを実施し発表を行った。体験活動では、１年生時に作成したスギ実生苗の植栽を実施した。

ディスカッションの結果を発表

②　安房中学校

【実施日】令和７年 11 月 14 日（金）**【場　所】**安房貯木土場外
【共　催】屋久島森林管理署　　**【参加者】**２年生 28 名
【内　容】安房貯木土場で、屋久島の林業の歴史とヤクスギ土埋木について説明を行った。その後、白谷雲水峡で、弥生杉が倒伏した経緯とこれまでの取組、そして今後の取扱について説明を行った。その後センターに移動し、保全センターの業務や、林業遺産や小杉谷の歴史について土埋木搬出の映像の鑑賞を交えながら説明を実施。体験活動では、丸太切り体験と木工体験を実施した。

土埋木について説明している様子

【実施日】令和７年 11 月 25 日（火）
【場　所】安房中学校　　**【共　催】**屋久島森林管理署
【参加者】１年生 23 名
【内　容】校庭に植栽されている樹木について「手作り図鑑」を使用した同定をグループで実施し、答え合わせを行った。その後、屋久島での苗木生産・下刈り・地拵えについて高性能林業機械の動画や写真を使用して講義を行った。最後にキャリア教育の一環として入庁案内を実施した。

手作り図鑑を見ながら樹木を同定

【実施日】令和８年２月３日（火）【場　所】春牧地区の町有林
【共　催】屋久島町役場産業振興課・屋久島森林管理署
【参加者】１年生 22 名
【内　容】屋久島町役場産業振興課から屋久島の森林や林業に関することの説明を行った。その後、屋久島森林管理署から、屋久島総合自然公園で育苗された屋久島地杉苗を使用した植樹指導を実施した。

慎重に植樹を行う

(4) インターンシップ

＜令和７年度（夏期）農林水産省就業体験学習＞
【実施日】令和７年９月 16 日（火）～19 日（金）
【場　所】屋久島森林管理署管内国有林
【共　催】屋久島森林管理署
【参加者】長崎大学３年生１名、宮崎大学３年生１名
【内　容】

切り株更新ついて説明

① 事業概要の説明
② 森林生態系の保全対策（モニタリング調査等）
③ 気象データ収集
④ ヤクシカ被害対策
⑤ 各種森林パトロール
⑥ レクリエーションの森の保全・利用
⑦ 弥生杉の保全対策
⑧ 屋久島森林管理署の業務概要と森林調査等に関する森林官業務

【参加者からの感想】屋久島は森林資源の生産と豊かな自然の保全とが同時に行われている島であることを強く認識した。地杉の伐採や出荷といった資源利用の現場と、生態系の保護やヤクシカ対策といった保全活動の現場を両方見学することで、生産と保全が対立するものではなく両立させながら進められている現実を学ぶことができた。また、署で勤務する若手職員との意見交換会を通じて、業務の実態や仕事への取組について話を聞くことができた。

(5) 屋久島森の塾

【実施日】令和７年７月 29 日（火）【場　所】安房貯木土場外
【共　催】屋久島町教育委員会・屋久島地杉加工センター・屋久島森林管理署
【参加者】12 名（教職員 10 名、屋久島町教育委員会２名）
【目　的】屋久島島内の小中学校では森林環境教育が行われ、子どもたちの自然に対する知識や郷土愛などを育む取組が行われている。それを直接指導する教職員の方々の、屋久島の森林・林業に関する知識を高めるとともに理解を深めることで、より充実した森林環境教育を行ってもらえるようにする。

加工機械の説明を受ける様子

【内　容】

① ヤクスギ土埋木と地杉島外出荷の現状
② 森林施業地見学（森林整備箇所）
③ 屋久島の林業再生（地杉苗の育苗）
④ 地杉の加工・ 販売（屋久島地杉加工センター視察）
⑤ 地杉を使った役場庁舎見学

【参加者からの感想】「屋久島の森林・林業に関する知識が増えた」「土埋木の保管や時代変遷」「次の世代へ、将来を見据えた考えなど良かった」「関係する皆様が連携されている」など多くの感想を頂いた。

(6) その他

除伐体験の様子

① 屋久島こどもエコ隊

【実施日】令和８年２月１日（日）
【場　所】屋久島環境文化研修センター・遊々の森
【主　催】屋久島環境文化財団　**【後　援】**屋久島町
【協　力】屋久島森林管理署**【参加者】**小学校３～６年生 10 名
【目　的】これからの屋久島を担っていく地元の子どもたちの環境保全活動及び学習を支援するとともに、それらの体験を通して、広く環境に関心を持ち、自らの責任と役割を自覚し、環境保全活動に積極的に参加する態度を養うことを目的に開催された。
【内　容】島内の小学３～６年生 10 名に対し、林業の全般的な話や森林生態系について講義を行った。屋久島に生育している植物のクイズを行い、屋久島の森林を林業という視点でも見てもらえるように、木材の利用方法や植林等の重要性について、映像資料等を使用し説明を実施した。その後、遊々の森へ移動し、天然更新したスギの枝打ちと除伐体験を行った。

② 令和７年度 ForestDay ～森と人がつながっているを実感する１日 in 7000 年の森～

【実施日】令和８年２月 15 日（日）**【場　所】**屋久島環境文化研修センター
【主　催】屋久島環境文化財団**【共　催】**環境省・屋久島町
【協　力】屋久島森林管理署・木繋プロジェクト**【参加者】**70 名
【目　的】「森と人との関わり」をテーマに、森と人が織りなす持続可能な循環から「共生と循環」の文化を様々な団体と協働・共創して、島民に広く普及することを目的に開催された。

箸づくりに熱中

【内　容】屋久島森林管理署と共同で、箸作り体験とヤクスギ土埋木搬出の映像の放映を行った。箸作り体験では、屋久島産「地杉」or 熊本県産「ヒノキ」を選び、「かんな」で箸の形に削ってもらいその後、サンドペーパーで表面を滑らかにし完成した。ヤクスギ土埋木搬出の映像は、2005 年に当時の屋久島森林管理署職員が撮影したもので、今年度編集を行い初公開した。当時の搬出の様子に興味を示してくれた参加者もおり、映像内のコメントに加えて詳しい解説も行った。この映像については、今後も森林環境教育で活用していく予定。

2. 屋久島自然休養林

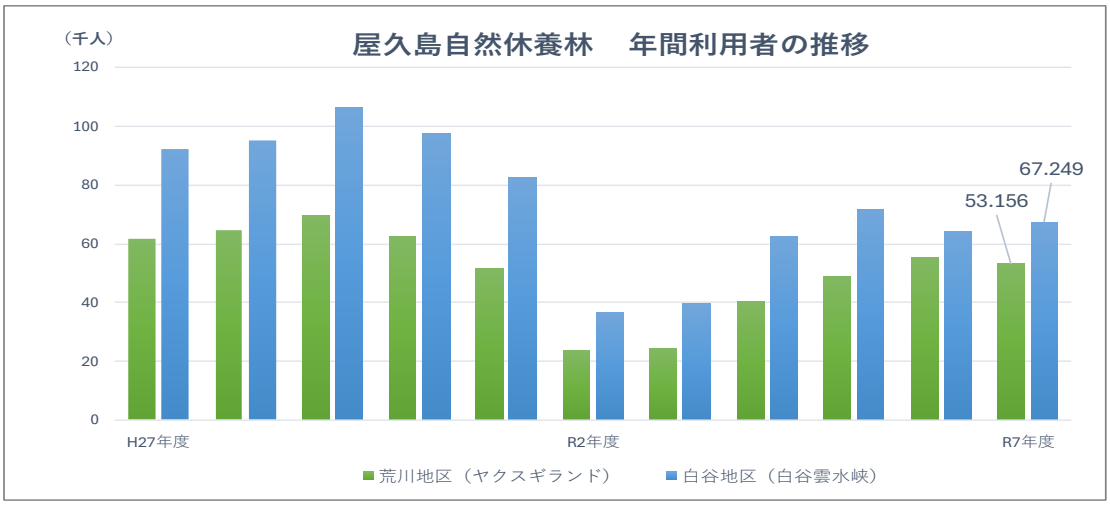
（1）森林環境整備推進協力金制度の実施

・森林及び利用施設の整備と環境美化のため、協力金制度を導入している。
・協定相手方　「屋久島レクリエーションの森保護管理協議会」（屋久島森林管理署長と締結）
・協力金の額　高校生以上　１人　500 円（令和８年４月１日から 800 円に改定）
・令和７年度協力金徴収額合計　49,189 千円（対前年比 105.3%　2,466 千円増）

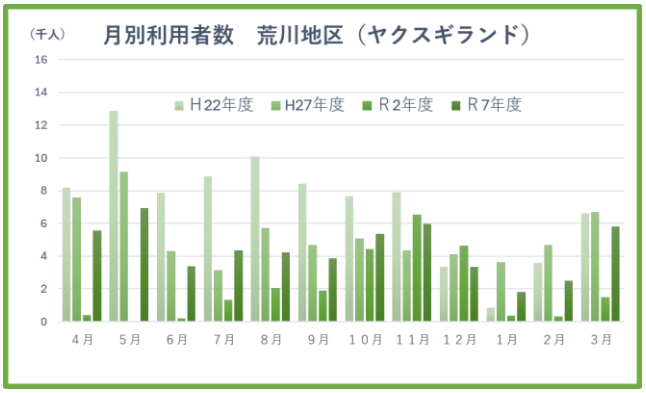
（2）利用者数

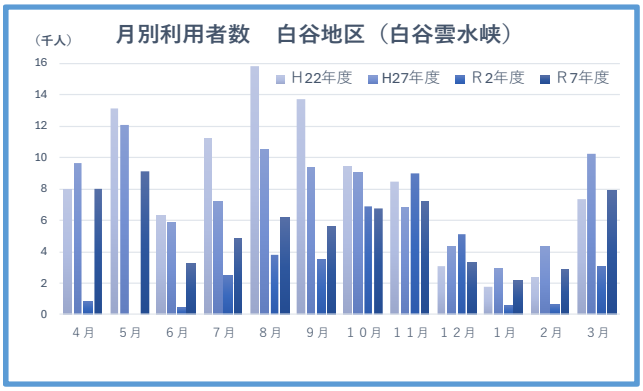
＜全利用者数＞

荒川地区（ヤクスギランド）　・・・・・・・・・53,156 人（対前年比 96.1%　2,144 人減）
白谷地区（白谷雲水峡）　・・・・・・・・・・・・67,249 人（対前年比 104.4%　2,812 人増）
計　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・120,405 人（対前年比 100.6%　668 人増）



※データ提供：屋久島レクリエーションの森保護管理協議会



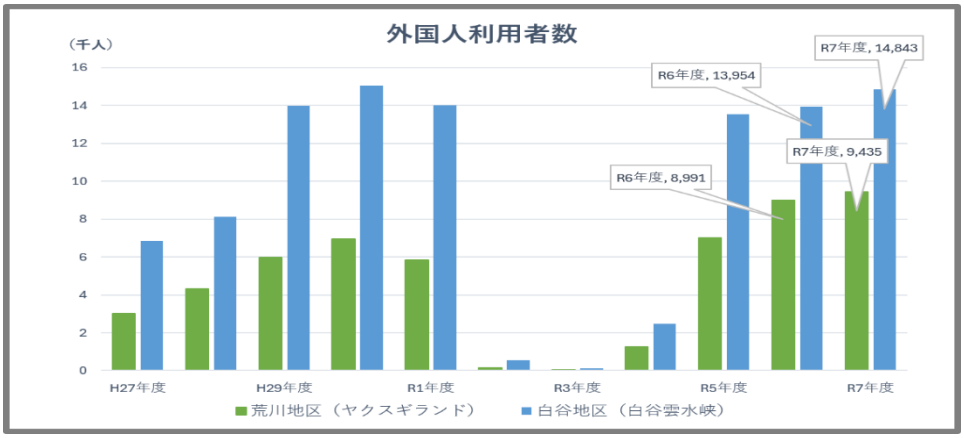


＜外国人利用者数＞

荒川地区（ヤクスギランド）・・・・・・・・・・・・9,435 人（当年度全体比 7.8%）

白谷地区（白谷雲水峡）・・・・・・・・・・・・・・・14,843 人（当年度全体比 12.3%）

計・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24,278 人（当年度全体比 20.2%）



ヤクスギランド 入口

散策道

白谷雲水峡 入口

苔むす森

太鼓岩からの展望

大川の滝

千尋の滝

田代海岸

Ⅳ その他

1. 入林の手続き状況

調査研究やドローンを含む撮影、イベント等を目的として国有林野に入林される場合は、事前に入林届の内容（目的、場所、期間等）に基づき、国有林野管理経営上の支障の有無について確認している。また、入林に植物採取を伴う際は高山植物等採取申請書をいただき、その現状変更に関係機関の許可が必要な場合には、許可書等についても確認している。入林目的の多様化や山岳遭難事故の増加を踏まえ、入林者などの安全確保を第一に、貴重な森林生態系の保全と利用の在り方について適切な対応が求められている。

(1) 入林届件数

令和７年７月 16 日より屋久島・種子島の国有林野への入林手続きは屋久島森林管理署に変更となったため、令和７年４月１日～同７月 15 日までの間、当センターで受付けた入林手続きの件数および調査研究目的等についてまとめている。

入林届（一般）件数

入林目的	
調査・研究	38
撮影（ドローン飛行を含む）	43
測量関係	0
その他（保安・警備など）	5
計	**86**

入林届（国または地方公共団体）件数

環境省	7
鹿児島県	6
屋久島町	2
警察・消防関係	1
計	**16**

(2) 調査研究者の入林

申請者所属	入林目的
フランス、ストラスブール大学 CNRS ユベール・キュリアン学際研究所	ヤクザルとシカの共生関係調査
北海道大学　北方生物圏フィールド科学センター	シカ・サル・鳥類の個体群動態と人口統計学的特性、シカの食性、社会行動、個体の行動域、遺伝特性、自然植生に対する影響、およびヒヨドリの生態と農産物被害状況との関係等を長期調査によって明らかにする
北海道大学環境科学院	樹木（イスノキ、ヤブツバキなど代表種）の葉、実生採取と光合成活性測定など植物生理学的調査
国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所	樹木病害虫調査

申請者所属	入林目的
国立科学博物館 植物研究部	希少なシダ植物の胞子採取
日本工営株式会社	環境 DNA 解析用採水調査（魚類相、特に国内外来種であるヤマメの分布調査）
埼玉県立春日部高等学校	岩石の採取
バイオマス資源開発合同会社	オオシロアリの採集：オオシロアリを材料とした研究開発により、オオシロアリのタンパク質源飼料としての利用可能性及び閉鎖空間での生産法を探求する
総合研究大学院大学	野性ニホンザルの離乳に関する生物学的調査
国立大学法人　富山大学	母岩を介したヤクスギの栄養塩吸収特性を同位体分析により解明する、日本全国に分布するスギは、その進化の過程で母岩由来の栄養塩を多く吸収し、自らの養分として活用していることが分かっている。申請者は、北限の天然スギ集団である青森をはじめ、全国の 7 箇所の天然スギの栄養塩吸収特性をストロンチウム同位体比分析により比較している。ヤクスギにおいても同様の調査を行う
金沢大学大学院自然科学研究科	屋久島に生息する野生のニホンザルの生態学的調査ならびに菌類子実体の散布生態の実態調査
静岡大学農学部	ニホンザルの昆虫食が枯死木分解速度にあたえる影響の調査
京都大学生態学研究センター	ニホンザルの研究/ニホンザルによるヤブツバキの花の食害の研究
京都大学	両生類相および、ヒキガエル、ニホンアマガエル、ヤクシマタゴガエルの遺伝的変異の調査/野生ニホンザルの野外観察調査
京都大学大学院人間・環境学研究科	遺伝解析のための葉の採取/シカ・サル糞の採集
京都大学大学院 理学研究科	屋久島西部域に生息する野生ニホンザルの行動観察/ウシノケグサ属の分類学的再検討、屋久島固有種ヤクシマグミの系統・窒素固定細菌相の検証と保全、ケイビランの分類学的再検討
京都大学 野生動物研究センター	屋久島の中・大型哺乳類の生態調査
大阪市立自然史博物館	ヤクシマシオガマ等植物の訪花昆虫調査、ヤクシマシオガマ、ノギランの蜜量調査および自殖確認のための袋がけ調査の実施
兵庫教育大学	ヤクシマシライトソウ（指定植物）およびチャボシライトソウ（指定植物）形態計測および遺伝子解析のための生株を採取
九州大学	植物の葉と茎の組織構造観察を目的とした採取
九州大学 大学院理学研究院 地球惑星科学部門	屋久島花崗岩に含まれる正長石巨晶について研究するため、露頭観察や岩石採取をする
一般社団法人九州 オープンユニバーシティ	タニギキョウ属とサワハコベ属の分子分類学的研究

申請者所属	入林目的
国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所九州支所	屋久島に分布するヤマザクラは沿岸部に変種のツクシヤマザクラが分布しているが、高標高地に分布するヤマザクラとの形態・遺伝の違いについて調査/絶滅危惧種ヤクタネゴヨウのモニタリング調査、共生菌類の探索/ヤクタネゴヨウと共生微生物の生態的相互作用の解明/サクラツツジの共生菌の探索と生態的相互作用の解明
屋久島照葉樹林ネットワーク屋久島	ヤクタネゴヨウ保全に係る調査及び松枯れ対策、屋久島の生物多様性に関する絶滅危惧植物種・希少植物種等調査
屋久島環境文化研修センター	SSH 等の生物・地質等の調査
個人（４件）	屋久島高標高域のザトウムシ相の解明とヤクニセタテヅメザトウムシの系統解析/DNA 抽出用カミキリムシの液浸標本サンプル採集/屋久島における甲虫目昆虫の調査/動植物の観察

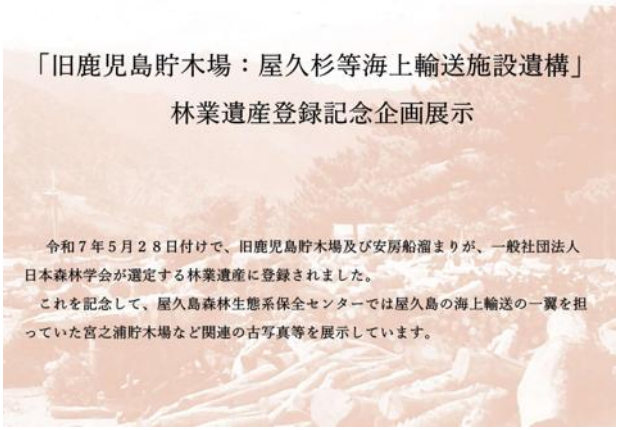
●国または地方公共団体

申請者所属	入林目的
一般財団法人鹿児島県環境技術協会	希少植物確認調査、移植適地選定調査
屋久島照葉樹林ネットワーク	環境省：屋久島国立公園計画見直しに係る自然環境調査
屋久島山岳ガイド連盟	屋久島国立公園避難小屋利用状況調査等業務（環境省）/屋久島国立公園登山道（永田岳線）修繕等業務
旅樂	環境省登山道整備事業
一般財団法人鹿児島県環境技術協会	道路整備事業に伴う動植物調査、現地踏査及びセンサーカメラ設置
熊毛地区消防組合　屋久島北分遣所	鹿児島県防災航空隊員と合同での、防災ヘリピックアップ（吊り上げ救助）可能ポイント調査
アジア航測株式会社	環境省業務（令和７年度屋久島における希少植物の生育状況調査等業務）における現地調査（希少植物調査）
株式会社　一成	環境省九州地方環境事務所発注の「令和７年度屋久島国立公園におけるヤクシカ保護管理対策推進業務」における、糞粒・糞塊調査の実施、および SS 体制によるヤクシカの捕獲作業の下見と実施

2. 広報活動

（１）庁舎内展示

当センターに保管されている資料やデータ等について、テーマを決めて庁舎内で公開･展示している。令和７年度は、同年５月に林業遺産に登録された「旧鹿児島貯木場：屋久杉等海上輸送施設遺構」の関連施設として「宮之浦貯木場」についての企画展示を行った。



屋久島の林業遺産としては、安房森林軌道や小杉谷集落跡等が良く知られているが、宮之浦や栗生、永田にも森林軌道や林業関連施設があり、既に「屋久島の林業集落跡及び森林軌道跡」として平成 28 年に林業遺産として登録されている。しかし宮之浦港や海上輸送等については一般的に目にすることが少ないことから、往時を偲ばせる古写真を中心に官船「景山丸」等についても紹介する機会とした。

また、昭和 43 年に石塚国有林内にて伐採された大径木のヤクスギ円板７枚についても実物と画像パネルを使って展示している。現在、ヤクスギの円板は、北は福島県から南は沖縄県まで研究者によって所在が確認されている。
その美しさから衝立やテーブルなどの工芸品としてはもちろん、年代確定ができる資料として過去の環境や宇宙の研究にも利用されている。

当センターでは、屋久島の森林生態系はもちろん、林業史等の研究についても今後も協力し、情報を発信していくこととしている。

当センターの円板（最大径 220 ㎝）

(2)「屋久島森林生態系保全センター」ホームページの更新

当保全センターの業務紹介や活動報告、屋久島の雨量観測データなどの情報を提供することにより地元施設や関係機関との密接な連携を図っている。また、屋久島の生態、森林の役割、自然と人との共生のあり方などに関する普及啓発を行うとともに、屋久島世界自然遺産地域内での保全活動を紹介し、広く一般の理解と協力を深めるために掲載している。

●令和７年度の洋上アルプス

令和７年 04 月　　令和７年度の業務計画
令和７年 04 月 01 日　　４月１日付け人の動き
令和７年 04 月 02 日　　令和７年度 グリーン・サポート・スタッフ（GSS）活動開始
令和７年 04 月 03 日　　令和７年度の重点取組事項
令和７年 04 月 23 日　　長野県林業大学校が屋久島研修を実施
令和７年 05 月 03 日　　GW 期間中の縄文杉周辺マナー指導を実施
令和７年 05 月 07 日　　屋久島自然休養林の利用状況(令和６年度)
令和７年 05 月 20 日　　令和７年度屋久島世界遺産地域連絡会議開催
令和７年 05 月 28 日～06 月 06 日　　シャクナゲ開花時期における登山指導を実施
令和７年 05 月 30 日　　中央中学校で森林教室を実施(４回目)
令和７年 06 月 11 日　　幹事会及び検討の場の開催
令和７年 06 月 17 日　　屋久島高校で登山指導を実施
令和７年 07 月 07 日～08 日　　屋久島世界遺産地域科学委員会・ヤクシカ WG を開催
令和７年 07 月 23 日　　令和７年度 屋久杉自然館特別展の開催
令和７年 07 月 29 日　　屋久島の森林・林業木材産業を知る～令和７年度「屋久島森の塾」開催～
令和７年 07 月 31 日　　令和７年度 屋久島レクリエーションの森保護管理協議会総会の開催について
令和７年 08 月 03 日　　令和７年度 夏休み親子森林教室の開催について
令和７年 08 月 04 日　　弥生杉防護柵内への侵入者を確認
令和７年 08 月 08 日　　「屋久島の自然と環境を次の世代へ」～弥生杉周辺整備看板設置～
令和７年 08 月 26 日～09 月 10 日　　夏休み期間中の森林パトロールを実施
令和７年 09 月 08 日　　宮崎大学と琉球大学の学生が弥生杉（倒木）の現状見学

令和７年 09 月 11 日～12 日　「屋久島森と人との共生ビジョン」策定協議会及びワーキング会議の開催について
令和７年 09 月 16 日～19 日　インターンシップの受け入れ
令和７年 10 月 01 日　令和７年度 大分舞鶴高校体験学習の実施について
令和７年 10 月 28 日　倒伏した弥生杉周辺のモニタリング調査開始
令和７年 11 月 04 日　屋久島森と人との共生ビジョン策定ワーキング会議の開催
令和７年 11 月 06 日　森林・林業の技術交流発表大会で発表
令和７年 11 月 14 日　安房中学校森林教室を実施
令和７年 11 月 18 日　湯梨浜学園高等学校（鳥取県）の屋久島研修生を受入
令和７年 11 月 20 日　松枯れ被害は減少傾向にあるが「優先的な対策を」
令和７年 11 月 25 日　安房中学校にて森林教室を実施
令和７年 12 月 08 日～09 日　花之江河流水分散対策意見交換会及び第２回幹事会の開催
令和７年 12 月 10 日　小杉谷周辺に侵入した外来種アブラギリを駆除 「屋久島外来種対策行政連絡会」
令和７年 12 月 25 日　大分県立日田林工高林業科屋久島研修を受入れ
令和８年 02 月 01 日　屋久島こどもエコ隊 ～遊々の森で 19 年ぶりに森林教室を実施
令和８年 02 月 03 日　安房中学校 植樹体験 ～森を盛り上げよう～
令和８年 02 月 05 日　ヤクシカ WG・屋久島世界遺産地域科学委員会等を開催～
令和８年 02 月 15 日　令和７年度 Forestday に参加
令和８年 02 月 17 日　「屋久島地杉苗採穂台木の仕立て方」現地検討会を開催 ～屋久島の森林を未来へ繋ぐ～
令和８年 03 月 04 日　屋久島レクリエーションの森保護管理協議会幹事会
令和８年 03 月 23 日　屋久島主要箇所の 2025 年雨量データ

森林教室

インターンシップ

技術交流発表大会

森の塾

弥生杉看板設置

パトロール

大分県日田林工研修

Forestday

植樹体験

アブラギリの駆除作業

これらのほかにホームページにはたくさんの情報が掲載されているのでぜひご覧ください

九州森林管理局 HP ＞ 森林管理局へようこそ ＞ 森林管理署等の概要 ＞
屋久島森林生態系保全センター

https://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/

令和８年 10 月

林野庁 九州森林管理局 屋久島森林生態系保全センター

〒891-4205　鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦 1577-1

TEL 0997-42-0331